パクリ 向井坂のよろい

げんじあきら

目次

バレンタインショコラ

●バレンタインショコラが売れ残る

２月14日だった。

「沢田さんちょっと来てください」

沢田民江は、甘根和人に呼ばれた。

甘根和人は、マーケティング本部長で常務取締役である。江尻製菓株式会社の３代目のオーナー社長になるのではないかと言われている。独身である。42になった。

「バレンタイン今日終わるんだけど」

「１／３くらい売れ残るらしい」

「どう売り切るか考えて案を持って来てください」

「大野部長はご存知ですか？」

「工場に行くことになってるから私がしばらく指示します」

沢田民江は、聞きたかったのだが、言葉を飲み込んでしまった。

甘根和人は、こういうところにも指示をしたがっているのだと思った。

「今晩倉庫に送り返させるから」

「工場の方は知っていますか？」

「沢田さんがお店と工場に知らせてください」

「私をＣＣにしておけばみんな納得だから」

「承知しました」

沢田民江は江尻製菓に入社してもうすぐ５年目に入ろうとしている。

26歳で独身である。

池尻製菓株式会社の本社は、新宿にある。高層ビルがよく見える６階建ての古いビルだ。自社ビルである。

「佐代子～ちょっと手伝ってほしいんだけど」

「なんですか？」

「バレンタインチョコ１／３くらい売れ残ったらしいの」

「１／３もですか？」

「売り切る案持ってこい」
「誰ですか？」
「甘根さん」
「本部長？」
「うん」
「大野部長は？」
「工場行くらしい」
「どういうこと？転勤？」
「わかんない」
「今井さんも知ってるの？」
「あんた話してきて」
「イヤだ」
「案つくるの手伝って」
「なにしてるんですか？」
「余ったバレンタインチョコ工場に戻して」
「勝手にメールしたら怒られます」
「メールしなかったら甘根さんに怒られるわよ」
「なんでわたし達っていつもこうなるの？」
「あんた話してきて」
「売り切り案たってお金かかるでしょ？」
「話してくるから待ってて」
「大野さんいません」
「今井さんは？」
「います」
沢田民江は、今井春馬の席に向かった。
「ちょっとお話しがあるんですけど」
「どうぞ」
「甘根本部長に呼ばれてバレンタインチョコ売り切り案をつくって持ってくるように言われました」
「新開につくってもらった」
今井春馬は、ニガニガしいといった顔をした。

「新開の案だけどこれを持って行け」
沢田民江はどうしていいのかわからなくなった。
「新開に一言言っておけ」
沢田民江は、新開誠のＡ４の３枚の案を渡された。
「新開君ちょっと話しあるんだけど」
「なんですか？」
「これあんたがつくったの？」
「バレンタインチョコの売り切り案ですか？」
「そう」
「今井さんにつくっておけって言われてました」
「いつ？」
新開誠は沢田民江に返事をしなかった。
「はじまる前？」
新開誠は返事ができなかった。
バレンタインチョコは、甘根和人の指示で、昨年の50％増しにしたのだが、今井春馬は、新開誠に、指示をしていた。最悪の場合にすぐに対処しないといけない。
「わたし甘根さんに緊急対策案をつくるように言われてるんだけど」
新開誠は返事をしない。
「新開君のこの案を使えって今井さんが言うんだけど」
新開誠は黙っていた。
「いい？」
「ええ」
多分お昼過ぎには甘根和人から電話がある。緊急なのだ。明日バレンタインチョコのパッケージのまま店頭に並んでいたら、売上を落とす。
「佐代子～手伝って」
沢田民江と今春佐代子は、頭を突き合わせて、新開誠のＡ４の３枚を覗いた。
「これ今井さん見たのかな～」
今春佐代子は、すぐにおかしいと思った。
多分、大幅に余ってしまったチョコの種類が違うと思った。

「生産はじめる前につくったらしいの」
「なんで？」
「今井さんが危ないと思ったんじゃないかな～」
「こんなこと聞いたら甘根さん怒っちゃう」
「だから黙ってて」
「どうしよう」
「何が余ってるかデーターあるの？」
「ない」
池尻製菓のバレンタインチョコは、自分のお店でしか売っていない。１７２０軒のお店がある。
「１／３くらい売れ残ってるって～どうしてわかったの？」
「知らない～」
「何が残ってるわかんないのに案なんかつくれないわよ」
「去年みたいに社内販売した方が簡単なんじゃないの？」
「量が多いからムリ」
「どんくらい？」
「多分10万箱」
「10万箱じゃ～ムリ」
「なんでこんなにつくったの～」
「わたし知らないもん」
「今年のバレンタインチョコの企画は誰なの？」
「ショコラティエは向井坂治さん」
「沢田さんは向井坂さんのファンでしょ？」
向井坂治はチョコレートのデザイナーではないのだが、甘根和人が依頼した。はじめてのショコラティエだった。
社内にもブリュッセルで修行をしているショコラティエもいるのだが、新しい池尻製菓を狙った。５割増しの目標を掲げたのだが、前年と同じ数だけしか売れなかった。
「２５００円の６個入りだよね」
「そう」
「至急に倉庫に返してもらわないと何が余ってるかわかんないわよ」

「単品はいいの～そのまま売ればいいから」
「２５００円のセットなのか」
「２０１４年バレンタインのパッケージに入ってる」
「じゃ～何が余ってるかわかってるじゃない」
沢田民江も混乱している。
「わたし１階のお店でもらってくる」
今春佐代子は、ビルの１階のショップへ向かった。
「10箱くらいもらってきて」
「わかった」
今春佐代子は、２５００円のバレンタインチョコを抱えてきた。
「早くしないとヤバイわよ」
「動かないの？」
「お昼までが勝負だけどバックヤードにいっぱいある」
「伝票どうした？」
「サインしてきた」
「売れなかったのかな～」
「10万残るとしても～去年と同じだからね」
「つくり過ぎなのか」
「向井坂治使ったから」
「ああ」
「沢田さんファンだけど～向井坂さんは本職のショコラティエじゃないからね」
「向井坂さんのことワルク言わないで」
「小売価格で２億５千万円ですけど」
「原価でも４千万円くらいか」
沢田民江も今春佐代子も知ってはいるのだが、中身のショコラを見たことがない。
「プラリネとトリュフとホワイトの板とボンボンショコラと生チョコとビターの板か」
「デザインが凝ってるな～」
「日本的じゃないね～」

「ヨーロッパですね」

「ちょっと新開君の売り切り案見せて」

「ゼンゼン種類が違いますね」

「なんで？」

「数だけ30万って最初に決めたんじゃないですか？」

「ホワイトデーもショコラ売れるけどもうやってるもんな」

「新開君みたいにはいかないですよね」

「このデザインじゃ～売り切りたってな～」

「10万箱も新しいのつくることになるんですけど」

沢田民江も今春佐代子も、黙ってしまった。

お誕生日ショコラ

●誕生日ショコラ
「なんかイベントない？」
「またセットつくるんですか？」
「タダで配ったら４千万円の損出す」
「新開君みたいなことですか？」
「ホワイトデーはもうやってるから使えないけど」
「向井坂さんに頼んだらどうですか？」
「向井坂さん高いから」
「いくらですか？」
「わかんない～甘根さんが頼んだんだろうけど」
「困りましたね」
今春佐代子は、そう言いながら、向井坂治へのメール案を打っていた。
「沢田民江と申します」
「向井坂治さまの２０１４年２５００円ショコラティエですけど」
「好評でしたが10万セット残すと思われます」
「このバレンタインショコラは向井坂治さまのショコラティエですのでアイデアを向井坂治さまにお聞きした方がいいのではないかと思っています」
「もし引き受けていただけるのでしたら見積をお願いしたいのです」
「勝手ながら今日中に案を出せと、甘根本部長に指示されています」
沢田民江は考えていた。
「沢田さんこれを見てください」
沢田民江は黙って見ていた。
沢田さんのパソコンに送ります。
沢田民江は勇気がなかった。自分がショコラティエでもないし商品開発者でもないので、直接向井坂治と接したことがない。ファンである。池尻製菓の多くの商品のパッケージをデザインしている。
「わたしがエンター押してあげましょうか？」

躊躇している沢田民江に今春佐代子は言った。

「やって」

今春佐代子は躊躇なく１秒もかからずにエンターを押した。

「２０１４年バレンタインショコラ２５００を倉庫に返送していただけるようお願いいたします」

「返送した数を沢田民江までメールでお知らせいただけますようお願いいたします」

「明日土曜日のオープン前に作業していただけますようお願いいたします」

「返送先は、工場倉庫にお願いいたします」

「ショコラは再加工する予定ですので、取扱注意でお願いいたします」

「返送２０１４年バレンタインショコラは、明日土曜日と明後日日曜日には、倉庫に到着できるように手配をお願いします」

「２０１４バレンタインショコラ返送分と表示していただけるようお願いいたします」

「マーケティン部の今春佐代子が土曜日と日曜日に工場倉庫に待機して数量などを確認します」

メールの原稿を見ていた今春佐代子が、工場倉庫に電話した。

「ちょっと読んでみて」

「読みました」

「今井さんと大野さんと甘根さんにＣＣがいいと思います」

「宛先は、各池尻製菓ショップ店長と工場倉庫課長がいいと思います」

「１７２０軒のあて先は？」

「全ショップをクリックしてください」

「これでいいの？」

「ええ」

「なんか怖いから今井さんに聞いてくる」

「甘根さんにも聞かないといけなくなります」

「わたし達ってホント弱いよな」

「エンター押してあげます」

「お願い」

今春佐代子は、躊躇なくエンターを押した。

「あんた明日大丈夫？」
「もうメール流れました」
甘根和人から電話があった。
「売り切り案がないけど」
「現在検討中ですから今日中に案をお送りします」
「月曜から再生産するつもりでいろ」
沢田民江は返事をしなかった。まだ何をつくるのか決めていないのだ。
「工場長に指示しておくから」
甘根和人は、それだけ言うと電話を切ってしまった。社内ケータイである。
「わたし今日中に５月の連休のショップ企画案をつくらないといけないから」
沢田民江は、いきなり心細くなった。
今春佐代子は、沢田民江の方を見なくなった。
15分間、あれこれ考えたのだが、グッドアイデアなど思いつかない。２０１４バレンタインショコラの売り切り案だ。
「沢田民江さま」
「誕生日ショコラです」
「パッケージはハート型にしました」
「５つ入ります」
「１２００円にしました」
「これでは売り切りになりませんがグッドだと思います」
「ご検討ください」
「お見積りですが次回新たな発注がいただけるものと確信しております」
「佐代子～これ見て」
今春佐代子はそれどころではないといった顔をした。
「ああ～この人天才」
「タダでいいっていうことですよね」
「うん」
「誘われたら晩ごはんくらい付き合わないといけない」
「あんた行って」
「わたしの名前なんかどこにも出て来ないもん」

「これでいいと思う？」
「沢田民江の案に書き直さないといけない」
「いいわよ～向井坂治案で」
「向井坂治さんのメールはそういうことじゃなくて沢田さんにあげますって言ってる」
「そうかな～」
「向井坂治案だったら甘根さんに怒られます」
「なんで？」
「向井坂治さんに頼むんだったら甘根さんができるから」
沢田民江は、集中して、向井坂治の案を沢田民江の案に書き替えた。
ハートのパッケージデザインなどは、プロではないので、向井坂案に較べたら見劣りする。
「お昼食べに行きますけど」
今春佐代子が言った。
12時30分だった。
社員食堂があるが、13時30分で締まってしまう。
「ちょっとこれ見て」
「甘根さんに送るのですか？」
「見て」
「明日工場で５個入りの種類を計算します」
「入れ替えの仕方キチンとしないと作業できないから」
「わかった」
「今井さんと大野さんにも送った方がいいです」
今春佐代子は、送り先を揃えて、自分でエンターを押した。
「スマホに転送してあります？」
「ごはん食べに行こう」
「うらやましいです」
「なにが？」
「沢田さん美人だからいっぱい仕事が来るから」
今春佐代子はいつもこう言う。
おでんを食べていた。

今春佐代子は、５月のショップ店頭企画を話していた。子ども中心の企画になるし子どものおかしの企画になる。
「ハートのパッケージをすぐに発注して出来上がりを知らせてください」
甘根和人からメールが来た。
「ちょっとメールしてくる」
「向井坂さんでしょ？」
「うん」
「電話した方がいいと思いますけど」
「番号わかんない」
「さっきメール来たから転送されてると思いますけど」
沢田民江は、電話をして急いで社員食堂の外に出た。
「もしもし～向井坂です」
「はじめまして～沢田民江です」
「なんでしょうか」
「あのハートのパッケージすぐに発注しろという指示なんですけど」
「私の送ったモノで良かったら月曜に納品できます」
「パッケージの会社をメールしておきます」
「私は表に出てないのでよろしくお願いします」
「すぐに見積もりが届きます」
「数量は～12万でいいですか？」
「明日と明後日にならないと数量がわかりません」
「このパッケージは今後も使えるから平気です」
「紙でできているのですか？」
「そうです」
「じゃ～見積をメールでいただけるようにお伝えください」
「図面も私から渡しておきます」
「よろしくお願いします」
沢田民江には、どうして明日と明後日で12万ものハートの紙パッケージができるのかわからなかった。
「どうでした？」
「明日と明後日で12万のハートのパッケージができるんだって」

「いくら？」
「見積もりが来る」
「向井坂さん？」
「自分は表に出ないからパッケージの会社からだって」
「ふ～ん」
沢田民江と今春佐代子は、社員食堂にある１００円コーヒーを買って席に戻った。
「半田紙業株式会社の半田湊と申します」
「社長をやらせていただいております」
「向井坂治さまから図面をいただきました」
「至急に見積をさせていただきます」
「今晩に資材を手配するつもりです」
「よろしくお願いいたします」
「最終デザインをやっていますので１時間後に送らせていただきます」
「これ見て」
今春佐代子は、イスを沢田民江の近くに寄せて来て半田湊からのメールを見た。
「図面描いてるんですね」
「そうらしい」
「あんた～ハートの色は何色がいい？」
「赤」
「また赤なの？」
「情熱的でいいと思いますけど」
「だけど～この人達仕事が早い」
「安さとスピードが売りなんでしょうね」
「そうかもな」
「いいですか？」
今春佐代子は、５月の連休の店頭企画が進まない。
15時30分になった。
「沢田さんは誰かにオリジナルチョコ渡したのですか？」
「佐代子は？」

「いまのカレ」
「わたしは誰もいない」
「じゃ～オンナが集まって配ったチョコだけですか？」
「うん」
「不思議」
「なんで？」
「すっごい美人なのに」
「それとこれとは別だわよ」
半田湊からメールがきた。
「沢田民江さま」
「誕生日ショコラのパッケージの見積もりを送ります」
「図面も送ります」
「もしよろしければ至急にカラーを決めていただきたいのですが」
「６案色を着けてみました」
「選択していただけるようお願いいたします」
沢田民江は、見積書を開いてみた。49円50銭だった。１２００円の誕生日ショコラである。少し豪華にしないと売れない。１００円でもいいと思っていた。
カラーも開けてみた。６色あった。サンプルである。
「ちょっとこれ見て」
「カラー来たんですか？」
「どれがいい？」
「赤」
「そうじゃなくて全部見て」
「やっぱ赤がいいと思います」
「これ～新製品かな～」
「売り切り案でしょ？」
「だけど～誕生日ショコラっていう新製品だよね」
「そしたら～秋田さんからやってもらわないとダメかな～」
「そうかもしんないです」
「商品企画書つくるわ」

「30分でつくんないと間に合わないと思いますけど」
「やる」
「パッケージの会社に色とか返事した方がいいんじゃないですか？」
「あんた案つくって」
「半田湊さま」
「現在マーケティングで商品企画書をつくっておりますので、出来上がり次第遅らせていただきます」
「パッケージの色ですが赤でお願いいたします」
「見積もりの件私は了解しましたが、商品開発部長とも相談いたしますので、１時間お待ちください」
「沢田民江」
「送りました」
「こんなメール見たら甘根さん怒るんでしょうね」
「自分が了解してるのに？」
「ええ」
「あんたエンター押して」
今春佐代子は、自分でエンターを押した。
「わたし連休の企画やってますから」
「わたしは誕生日ショコラの商品企画書つくる」
「30分黙ってやります」
「秋田さんいるの？」
「机に座っています」
沢田民江と今春佐代子が30分も何も言わないで集中していることなどない。どちらかが何かのことで困っているか悩んでいる。相談しているわけではないのだが、しゃべっていると、なにかが前進する。１人だと勇気もない。
「ちょっとこれ見て」
沢田民江は、マーケティングの商品企画フォーマットどおりに、お誕生日ショコラ案をつくった。
通常パターンだと、同じマーケティング本部の商品開発部長の秋田勇治に渡って、商品開発会議にかけられて、テーマアップとなる。
今回の場合は、そんな悠長なことはやっておられない。

「表紙の下に、２０１４年バレンタインショコラ２５００の緊急対策沢田民江って書いた方がいいと思います」
「なんで？」
「開発会議にしますとか秋田さんとかに言われたら甘根さんに怒られます」
「わたし達って～困ることが多いよな～」
「ええ」
「あんた一緒に来て」
「わかりました」
沢田民江と今春佐代子は、秋田勇治の席に向かった。
「ちょっとお話しがあるのですが」
「いま忙しい」
「緊急のことです」
秋田勇治は、しかめっ面をして沢田民江と今春佐代子を、近くのテーブルに招いた。
「なんですか？」
「これをお願いしたいのですが」
「わたしは、朝１番に甘根本部長に呼ばれて、バレンタインショコラ２５００の売り切り案を午前中までにつくって持って来いと言われました」
「まだわかりませんが、十万セット残る見込みです」
「なんでそんなことがわかるんだ」
「バレンタインは今日じゃないか」
「甘根本部長の見込みでもあります」
「これが先ほど甘根本部長と大野部長と今井課長にお渡ししたバレンタインショコラ２５００の売り切り案です」
「お誕生日ショコラ１２００になったらこれは新しい商品になるかと思いましてこの商品企画書をつくりました」
「これは緊急対策だから商品企画にしないとおっしゃるのでしたらいまのまま進行します」
「今のまま進行するとはどういうことですか？」
「明日の土曜日と日曜日にお店から工場倉庫に返送していただきます」
「すぐに解体します」

「このお誕生日ショコラのパッケージを明日と明後日で12万作ります」
「月曜と火曜で工場で、再生を行います」
「お誕生日ショコラを生産します」
「水曜日に品質検査があります」
「十万だとして原価でいくらだ」
「４千万円です」
「甘根本部長は？」
「わたしがいまお話ししたのが、甘根本部長の考えです」
「これを商品企画としてやれとか緊急対策でやれとか指示されていないので、秋田部長にお伺いをしようと思って来ました」
「時間がないのか」
「はい」
「ちょっと待ってろ」
「よろしくお願いします」
沢田民江と今春佐代子は、秋田勇治が、甘根和人の机に向かったのだと思った。
「２０１４バレンタインショコラ２５００のまま５００円で販売するんだったらラクだったんだけどね」
今春佐代子が言った。
「会計的にもめんどくさいです」
「なんでそんなこと知ってるの？」
「会計的には新製品企画にしないとかえってめんどうです」
「明日わたしが工場で相談します」
「めんどうだから５００円売り切りになるのかな～」
「パッケージがバレンタインだし傷がつきます」
「池尻製菓？」
「ええ」
「秋田さんはどういう案だと思う？」
「５００円売り切りじゃないですか？」
「こんなんで商品企画にしたくないから」
「しかめっ面してたよな」

「ええ」

秋田勇治が返ってきた。

「この商品企画書を受け取る」

「コスト明細を付け足してください」

「わたしが明日と明後日工場で相談しますので、明細を送らせていただくことではいけませんか？」

「月曜日に必ず送るように」

「承知しました」

「この商品を梶君が担当するので、商品化は、梶君に引き継いでください」

「承知しました」

梶功は、商品開発の緊急モノを多く手がけるベテランである。45歳だと思った。何でもに詳しい。

「梶君に話しますから、後で詳しい話しを聞きに行かせます」

「ありがとうございます」

沢田民江と今春佐代子は、互いに何かを考えながら席に戻った。

「向井坂さんと半田さんにメールしておいた方がいいです」

「なにを？」

「梶さんが担当するから」

「梶さんは、正式見積もり出せとか言うから」

「向井坂さんは出て来ないでくれって」

「あんた書いて」

「食堂でコーヒー買ってくる」

今春佐代子は、沢田民江のパソコンで沢田民江のとしてメールを書いた。

「向井坂治さま　半田湊さま」

「すごいスピードでお仕事をされていて驚いています」

「ありがとうございます」

「別紙のとおり、ホントは、２０１４年バレンタインショコラ２５００の売り切り策だったお誕生日ショコラは、商品企画になりました」

「12万セットですが、解体してお誕生日ショコラにして、それで終了になるかどうか、定かではありません」

「商品企画になったので、商品開発の梶功が担当して、月曜と火曜日の生産

を担当することになりました」
「梶は、半田さんに、正式見積もりなどを要求すると思いますが、よろしくご配慮くださるようお願いいたします」
「向井坂さんのことは、社内には知らせてありませんので、お誕生日ショコラのことは、沢田民江が、責任を持って対処いたします」
「梶からスケジュールを出すように要求されるでしょうが、土曜日曜で12万個の赤のハートのパッケージの生産後、日曜の夕方倉庫納品予定は、変わっておりませんので、よろしくお願いいたします」
沢田民江が、コーヒーを２つ持って帰ってきた。
「これ読んでください」
沢田民江は、今春佐代子が書いた向井坂治と半田湊宛てのメールを読んだ。
「佐代子ってこういうのよくわかるよね」
「わたしボケってしてるから」
「沢田さんは美人だからそれでいいんです」
「わたし５月の連休企画に集中します」
「ワルイね」
「オレが引き継いだから詳しいこと聞かせてください」
梶功がやってきた。
半分くらい白髪だが、動きは若々しい。
「半田紙業には明日行くから」
「ご存知なんですか？」
「小さい会社だけど小回りがきく」
「パッケーデザインはこれで決まりでいいんですね？」
「よろしくお願いします」
「見積書はオレにメールで送っておいて」
「49円50銭ですけど」
「これでいいって電話した」
「12万もこれでいい」
「明日の朝はバレンタインショコラ２５００がショップにあったらまずい」
「沢田さんは明日はどこですか？」
「ここです」

「今春さんは？」
「工場で返送分の確認とコスト計算します」
「会社のケータイに電話するから」
「よろしくお願いします」
「でもあんたたちよくこんなの思いついたな」
「今朝甘根本部長に言われたんだろう？」
「はい」
「たいしたもんだ」
沢田民江と今春佐代子は返事ができなかった。
これは、向井坂治が考えた企画なのだ。
17時を過ぎてきた。
「沢田さん今日はどうするんですか？」
「なんかあるの？」
「もうすぐ５月の連休の企画が終わるんだけど見て欲しいんです」
「いいわよ？」
「約束とか平気ですか？」
「カレいないからね」
「カレーテイクアウトしてきます」
「いいわよ～わたしが行くから」
「すみません」
「５時過ぎた？」
「もうすぐです」
「５時前に食べたら怒られるから」
「あれはここで食べたからです」
「そう？」
沢田民江は、近くのカレーショップに出かけた。
「５時過ぎた？」
「過ぎました」
「コピーしておきましたから食堂で食べながら聞いてもらっていいですか？」
「わかった」

「食堂さむいかな～」
「膝掛け持って行く」
「コピーしてすぐに行きますから」
「うん」
沢田民江と今春佐代子は、２人で１人前のようでもあり２人で３人前のようである。
「５月連休さ～オトコの子しかショップに来ないんじゃまずいよな」
「ショコラはオトコの子はあまり買わないです」
「どうするの？」
「だからこれ見てください」
「ワルイ」
「いただきます」
「ここのカレー安いけどおいしいよな」
「旅ショコラにしたんですけど」
「え？」
「60％の人が旅するんだけど」
「そうなの？」
「いってらっしゃいショコラ」
「すごい豪華にしないでカジュアルで」
「１２００円で５個」
「ショコラティエは？」
「まだわかんない」
「お誕生日ショコラうまくいったら～向井坂さんもありかな」
「沢田さん気に入ったの？」
「顔も知らない」
「うまくいったらね」
「マーケティング会議っていつ？」
「来週木曜だけど今井さんに月曜に出さないといけない」
「わたしが月曜日は工場に行こうか」
「お願いしてもいいですか？」
「いいわよ～」

「じゃ～旅ショコラ１２００でいいですか？」
「こんなのはじめてだから～おもしろいと思う」
「節句のおかしはもうやってますから」
「かしわ餅ね」
「いろいろ～いつものとおりです」
「そういう意味だったら～いいかもな～旅ショコラ」
「５月の旅ショコラがいいかも」
「８月の旅ショコラもつくるんですか？」
「少しダブらせとけばさ～余っても使えるから」
「同じっていうわけにはいきませんよね」
「１月の旅ショコラはそれなりに１月じゃないとまずい」
「ショコラティエ次第ですね」
「うん」
翌日土曜日の９時だった。
「これから生産に入る」
「私がＯＫを出した最終試作品の写真を送ります」
「生産に入ったらすぐに沢田さんと今春さんに完成品パッケージを10個届けます」
「バイク便で行きます」
沢田民江は、半田紙業は、ひょっとして、昨日は徹夜で準備してくれたのかもしれないと思った。
「寒いので暖かくしてガンバってください」
沢田民江は、短いが温かいメールを返信した。
ＣＣで今春佐代子にも送った。
１７２０のお店から次々に２０１４バレンタインショコラ２５００の返送数がメールされてきた。
９時20分には、もう一時退避するしかない状態になった。
９時40分にはすべてのメールが届いた。沢田民江１人でやっている。午前中いっぱいかかると思った。
多分、甘根本部長が聞いてくる。
10時30分にお誕生日ショコラの赤いハートのパッケージが10個届いた。

もう12万個の生産に入っているのだ。
「梶功さま」
「お誕生日ショコラが10個届きました」
「イメージのとおりのお誕生日ショコラのハートパッケージになっています」
「ありがとうございました」
「半田紙業さまによろしくお伝えください」
ＣＣで今春佐代子にも送った。
「２０１４バレンタインショコラ２５００を一旦会計上解体して部品に戻します」
「パッケージなどの損失と作業費負担分が損失となります」
「10万として計算すると、83円ですので、８３０万円の損失になります」
「お誕生日ショコラは、売上が１２００円の12万で１億４千４百万円が見込めます」
「原価は、パッケージ49円50銭と５個の再生したショコラと作業費負担分で、３５０円となります」
「お誕生日ショコラ12万をすべて販売できたとしたら、１億２百万円の工場利益となります」
「２０１４バレンタインショコラ２５００を解体して出る損失８３０万円をお誕生日ショコラの工場利益１億２百万円で補うことができます」
「この内容を、今井さんと大野さんと甘根さにお伝えください」
「同じく、秋田さんにお伝えください」
今春佐代子からメールが届いた。
沢田民江も、どうなるかよくわからなかったところだった。
しかし、もしお誕生日ショコラが成功すれば、凄いことになる。瓢箪から駒である。
沢田民江は、今春佐代子のメールに近い言葉で、箇条書きにして、状況報告として、今井春馬と大野欣二と甘根和人に送った。今春佐代子と梶功はＣＣにした。
10分後に、梶功からメールが来た。
秋田勇治に宛てたメールである。

内容は、エクセルにまとめた原価内訳だった。予想と書いてあった。
ＣＣが沢田民江と今春佐代子になっていた。
順調だった。昨日の朝、甘根和人に２０１４バレンタインショコラ２５００の売り切り案を出せと言われた時にはどうしたものかと思った。
トントン拍子に、ここまできてしまった。
ホントに、瓢箪から駒である。
まだ、お誕生日ショコラを発売しないとわからない。
12時になったが今日は社員食堂が休みである。土曜日だ。１階のショップはやっている。沢田民江は、駅で弁当を買って来た。５４０円弁当だ。
電子レンジで温めるために社員食堂に向かった。
１７２０店からの２０１４バレンタインショコラ２５００の返送数を、エクセルに書きこんでいた。チャックしないといけない。
弁当を食べてチェックするつもりである。
「工場返送数はいくらですか？」
梶功からメールが来た。
一応、10万の返送があると想定して12万のお誕生日ショコラのパッケージの生産をした。変更することはできないが、気になる。
「打ち込んだ数では、９万６５２１個ですが、これからチェックしますので、少々お待ち下さい」
「１７２０店舗全店から返送があります」
梶功と今春佐代子にメールした。
沢田民江は、せっかく温めたお弁当をそのままにして、チェックを始めた。
「各店から連絡のあった２０１４バレンタインショコラ２５００の返送数の集計を送ります」
店別エクセルにした。今春佐代子は、この一覧表をもとに返送品のチェックと解体をすると思った。
「どうもありがとう」
「９万６５２１のままだとは驚きです」
梶功から返事が来た。
「これで荷物のチェックをします」
今春佐代子からもメールが来た。

13時になっていた。
沢田民江は、もう１回チンするために社員食堂に向かった。
向井坂治から電話がきた。
「順調でしょうか」
「ありがとうございます」
「12万のお誕生日ショコラのパッケージは生産中で明日の夕方工場に納品されます」
「２０１４バレンタインショコラ２５００は９万６５２１箱が工場倉庫に返送されます」
「今はもうお店にはありません」
「原価の計算もしました」
「もしお誕生日ショコラ１２００が12万個完売したらすごい儲かります」
「瓢箪から駒になります」
「まだ販売しないとわかりませんが」
向井坂治は黙って聞いていた。
少しの間があった。
「もしうまくいったら食事をご馳走させてください」
思いもかけない言葉だった。
「もしうまくいったらお願いします」
「また連絡させてもらっていいですか？」
「かまいません」
沢田民江は、うれしいのだが成功するかどうかの方が気がかりで、複雑な心境になった。
甘根和人は、沢田民江に、２０１４バレンタインショコラ２５００の売り切り案を指示した。うまくいかなかったら、それなりのことがあるだろう。向井坂治には、感謝している。自分が表に出ないで、誕生日ショコラ案も沢田にプレゼントしたカタチになっていることを有難いと思っている。
遅い時間のお弁当になった。
池尻製菓本社では、工場もお店も無休なので、基本的に休みである土日にも、誰かが出勤している。
しかし、今日は親しい社員は誰もいない。

沢田民江は、ポツンと１人で仕事をしている感覚である。
遠くに、数人いるが、話しもしない。
15時になって今春佐代子からメールが来た。
「解体してショコラを取り出す作業を始めました。流れ作業で10人かかってやっています」
「衛生的な部屋で、何も問題はないと思います」
「１時間冷凍室に入れておいて固めた後に解体します」
「固まっているショコラをショコラトレイに移していきます」
「わたしは、解体したパッケージを集める係をやっています」
写真入りのメールを送ってきた。
「オレは明日工場で解体作業を手伝います」
「パッケージの生産は問題ないので、明日の夕方には12万箱入荷されます」
梶功からメールが来た。
「わたしも工場にいこうかな～」
沢田民江は今春佐代子にメールしてみた。
「沢田さんは本社にいてください」
「上の人から連絡あったりお店から連絡あったりしたら困るから」
沢田民江は、どっちが先輩かわからないといつも思ってしまう。
「どうなんだ」
「順調に解体しています」
「いくらなんだ」
「９万６５２１です」
「明日と明後日で終わるのか」
「今の進行では終わる予定です」
「誕生日ショコラのパッケージは」
「生産を続けていて明日の夕方12万箱が工場に納品されます」
「月曜から誕生日ショコラの生産はできるのか」
「できます」
「品質管理に立ち合わせるように」
「解体の方も品質管理が立ち合っていますし生産も立ち合います」
「いつから店に出すんだ」

「水曜日に品質保証が抜き取り検査します」
「その結果次第なのか」
「そうです」
「大丈夫なのか」
「ええ」
「じゃ～お店に割り振って出荷する計画をたててください」
「誕生日ショコラのコンセプトやセールストーク集を考えてお店にメールしてください」
「誕生日ショコラを明日の朝自宅に持って来てください」
「コンセプトとセールストーク案はその時に一緒にお願いします」
沢田民江は、しまったと思った。
「甘根さんだけど～日曜の朝～明日だけど～お誕生日ショコラを持って来いって言うんだけど」
「お誕生日ショコラのお店への割り振りとコンセプトとセールストーク案を一緒に持ってこい」
すぐに今春佐代子からメールが来た。
「今日もらった10個のパッケージにわたしがつくるから平気」
「今晩沢田さんのアパートに行く」
「お店でのポスターつくんないといけない」
「今晩案つくんないといけない」
「わたし遅くなるから晩ごはんお願いします」
「お店への出荷の割り振りは沢田さんが案つくってください」
「コンセプトとセールストーク案も考えておいてください」
「割り振りはわたしのパソコンにかしわ餅の割り振りがあるからそれを参考にしてください」
１７２０店もあるのだ。どの店が大きいとか立地が良いとか回転が速いとか、よくわからない。沢田民江にはよくわからない。
今春佐代子が、どうしてかしわ餅の割り振りができたのかわからない。
かしわ餅は16万個を割り振ってあった。１店当たり１００個くらいである。
沢田民江はお店を知らない。仕方なく、12／16を掛けて割り振った数字に変更した。１店当たり70個くらいだ。

割り振った根拠を問われると困るのだが、こうやって振ってみると、12万という数字は、大きな数字ではないことがわかる。
「佐代子～プラリネとトリュフとホワイトの板とボンボンショコラと生チョコとビターの板から５つどうしたの？」
２０１４バレンタインショコラ２５００を解体して６つのショコラをお誕生日ショコラでは、５つにするのだ。
「６つ並べておいて１つづつずらしていきます」
「６つのショコラの特長を書いてどれか５つが入ってますにしてください」
沢田民江はすぐに返事をした。
「２０１４バレンタインショコラ２５００と同じじゃないかってわかるんじゃないの？」
すぐに返事が来た。
「２０１４バレンタインショコラ２５００ではそんなことどこにも書いていません」
「バレンタインだから」
「お誕生日ショコラだとオンナがオンナにプレゼントすることも多いから」
沢田民江は、先にポスター案を考えることにした。
時間がないから写真が使えない。
そうかといって沢田民江は、デザインなどできない。真っ白になってしまう。
言葉でコンセプトは書けるのだが、社内の企画書になってしまう。
「明日の朝、甘根本部長に、お誕生日ショコラのコンセプトシートというかポスターの案を持っていないといけないのですが、お誕生日らしい写真かデザインの手持ちがありません」
「向井坂さんに投げていただけるような材料はありませんでしょうか」
次第に追い込まれてきて、向井坂治にメールしてしまった。そもそもお誕生日ショコラ１２００は、向井坂治にプレゼントしてもらったものだ。その上に、ポスターの素材案がないか聞いているのだ。
コンセプトシートやセールストーク案をエクセルにしておいた。今春佐代子がダメを出すのがわかっている。
「解体作業は全員女性がやっているので、今日は19時で打ち切ります」

「３万箱丁度になります」
「明日は朝から解体できるので問題はないと思います」
「わたしも19時になったら沢田さんのアパートに行きます」
沢田民江は慌てた。
しかし、今春佐代子と２人の方が早く進むことは間違いない。
沢田民江は、メモリースティックに、関連の情報を移し始めた。
19時には出ないといけない。
「沢田民江さま」
「別紙のポスター案を使っていただけたらうれしいです」
「ありものですので費用はかかりません」
沢田民江は、開いてみた。
ポスターだった。
写真だった。
北欧風男女と中国風女性とアメリカ風黒人男性と日本風男女が、ハートのパッケージのお誕生日ショコラをそれぞれ持って、だれかに差し出している。バックは、何かのステージのようだった。みんな笑っておめでとうと言っている。
１時間くらいで、どうしてこのポスターがセットされたのかわからない。しかも、お誕生日ショコラをみんなが持っている。しかも、お誕生日ショコラを開けて５個のショコラが見える写真も添付してあった。
使うのだったらどうぞということだろう。
「向井坂治さま」
「たった１時間くらいでこんなものが出てくるなんて驚きです」
「今から相談しますので、また連絡させていただきます」
「ありがとうございました」
沢田民江は、すべてをメモリースティックに移して、帰り仕度をはじめた。
「もしもし」
「沢田さんどこですか？」
「わたしのアパートの近くのスーパー」
「今ですか？」
「これから入る」

「わたしも行きます」
「近くにいるの？」
「沢田さんが見えます」
「ここで待ってる」
道路を横断する今春佐代子が見えた。
「おつかれさま～」
「あんた大丈夫？」
「平気です」
「わたし料理したくないからおすしかなんか買っていこう？」
「おすしに唐揚げ？」
「ビール買ってきます」
「ダメだよ」
「ノンアルコールでいいです」
「わかった」
「そのサラダもおいしそうだから」
「わかった」
今春佐代子は、月に１度くらい沢田民江のアパートで晩ごはんを食べている。お互いに自由になれる。お店よりもゆっくりできる。
「９時までにごはん食べる」
「お湯沸かします」
「わたし着替えるから」
「どうぞ」
「あんたも着替えたら？わたしの」
「そうします」
「持ってくるから」
「打ち上げだったらいいのにな～」
沢田民江は、隣の部屋から今春佐代子がいつも着ているセーターとパンツを持ってきた。
「寒かったらヒーターの近くにいて」
「平気です」
「チンした？」

「唐揚げおいしそう」
「いただきます」
「かんぱ～い」
「何にかんぱいなの？」
「誕生日ショコラ」
「梶さんメールあった？」
「きてる～19時にオレも帰ります」
「よかった」
「梶さん～うわさと違いますね」
「うわさって？」
「仕事速いけどすぐ怒る」
「知らない～」
「サラダ買い過ぎました？」
「食べられるわよ」
「やっぱ唐揚げおいしいです」
「梶さん優しいけど」
「馬が合うんじゃないですか？」
「わたし？」
「こういう緊急の仕事ばかりやってるみたいだし」
こんな話しをずっと絶えることなく続けることになる。
「おすし食べないと９時になる」
「お茶煎れます」
「うん」
沢田民江はパソコンを立ち上げた。
「ちょっとこれ見て」
「どうしたんですか？」
「向井坂治さん」
「頼んだのですか？」
「フリーの写真だからタダだって」
「ポスターになってますけど」
「うん」

「どうしてお誕生日ショコラ持ってるんです？」

「わかんない」

「写真修正したんですか？」

「わたしゼンゼンわかんない」

「これ使っていいんですか？」

「どうぞって言った」

「この添付してあるの貼り付けます？」

「うん」

「ここでいいですか？」

「うん」

「もしもし」

「え？」

「三沢さんですか？」

「いまからデーター送りますから印刷して欲しいんですけど」

「ポスターです」

「わたし今から取りに行くから」

「お金は旅ショコラの印刷と一緒にしてください」

「送ります」

「沢田さんのパソコンからだけどいいですよね」

「うん」

「そこまでやんなくてもいいと思うけど」

「明日の朝甘根さんがこれ見たら驚きます」

「これコンセプトなんだけど」

「なんか～ポスター見たらいいみたい」

「ああ」

「セールストークいらない」

「そうね」

「このポスター小さいの印刷してビラにして配りましょう」

「ちょっとビラつくっていいですか？」

「このまま縮小したら字が見えないから」

「おすし食べててください」

沢田民江は、ケータイメールを調べながらおすしを食べていた。
「わたしのメモリースティックに写していいですか？」
「うん」
「１時間で帰ってきますから」
「おすしは？」
「帰って食べます」
「あんた泊まるの？」
「多分」
「着替えは？」
「明日も工場だからこのままでいいです」
「急いで帰ってきて」
「いってきます」
沢田民江は、今春佐代子と２人で仕事をすると、何でも早く進むと思ってしまう。
１時になった。
「甘根さんちって知ってるんですか？」
「自宅に持って来いって３度目」
「沢田さんには何でも言えちゃうんだよな」
「この紙袋無地だから」
「うん」
「ポスターとビラと企画書とか印刷したものでいいですか？」
「入れておいて」
「自分で確認した方がいいです」
「６つのショコラの特長書いてるから」
「ビラには簡単に書きましたけど」
「お店で聞かれた時に困ったらいけないから」
「お店の資料に加えるのですか？」
「うん」
「完璧だな～」
「あんたシャワーしてきて」
「パジャマ持って行くから」

「工場の仕事は疲れるから寝ないといけない」
今春佐代子は、今座っているソファーをベッドにして寝る。それでも快適である。
「佐代子おはよう」
「おはようございます」
「ごはんやったの？」
「パンとスープと卵です」
「あんたもう着替えしたの？」
「工場は早いから」
「いただきますしよう」
「顔はいいんですか？」
「あんた遅くなるから」
「じゃ～いただきます」
「いただきます」
「電話です」
「もしもし～」
「今井課長ですか？」
「今から甘根本部長の自宅に報告に行きます」
「今日で２０１４バレンタインショコラ２５００の解体を終わって明日からお誕生日ショコラの生産を２日でやります」
「１万２千です」
「甘根本部長にはお誕生日ショコラの店頭ポスターとビラと販売マニアルをお渡しします」
「すぐに本社に行きますので」
「席にいらっしゃいますか？」
「甘根本部長の説明が終わったらすぐに本社に行きます」
「すぐです」
「わたし達ってタイヘンですよね～」
「甘根さんって何時ですか？」
「９時」
「いっぱい時間あるから」

「うん」
「パン食べてください」
沢田民江は、甘根和人の自宅にタクシーで向かった。日曜である。
「お送りしてありますけど」
「これが１７２０店のお店から返送された２０１４バレンタインショコラ２５００の一覧表です」
「９万６５２１です」
「工場で確認して解体していますが、まだすべてが工場に届いているわけではありません」
「昨日３万セットを解体しました」
「今日中にすべて終わる予定です」
「明日と明後日でお誕生日ショコラの生産をやります」
「12万箱です」
「水曜日に品質保証のチェックがあります」
「お誕生日ショコラ12万箱の出荷は、木曜日には可能になります」
「これはお誕生日ショコラの店頭ポスターです」
「立って持っててください」
沢田民江は、立ち上がってポスターを開いて見せた。甘根和人は、しばらく見ていた。
「これはポスターと同じですがビラです」
「販売マニアルはありますか？」
沢田民江は、コンセプトや６つのショコラの特長やポスターやビラを収めた販売マニアルを手渡した。
「品質保証がＯＫを出したら２月20日の木曜に全店に出荷してください」
「１７２０店の数の割り振りはできていますか？」
沢田民江は、エクセルの一覧表を渡した。
甘根和人の沢田民江への話し方が変わったと思った。命令調ではなくなった。
９時30分には、沢田民江は、新宿の本社に入った。今日もお店は開いているのだが、オフィスは少ない。今井春馬は、多分、今日は休みだったと思う。
「さっき甘根本部長から電話があった」

「２月20日の木曜日に１７２０全店に出荷して販売を始めろ」
「説明してくれ」
沢田民江は、さきほど甘根和人に説明したとおりの話しをした。
「なるほど」
「このマニアルはデーターになっているのですか？」
「今送ってください」
沢田民江は、席に返って、お誕生日ショコラ１２００の販売マニアルのデーターを今井春馬に送った。
「少し修正して割り振り表と一緒に、１７２０店に送るから」
「今井課長が送ってくださるんですか？」
「問い合わせは沢田民江にお願いしますにしておく」
「わかりました」
１時間後に、緊急企画「お誕生日ショコラ１２００」の発売についてが、社内に発信された。
ＣＣが甘根和人と大野欣二と秋田勇治になっていた。緊急で相談したのだ。
「素早かったですね」
「工場は平気？」
「大丈夫です」
「梶さんは平気？」
「今一緒にパソコン見てるから代わります」
「ここまですごく早いんですけど大丈夫ですか？」
「明日の品質保証だけです」
「品質保証のチェックが通り次第って書いてくれればよかった」
「そうですね」
「梶さんは明日の生産も立ち合うのですか？」
「明後日も品質保証のチェックも立ち合います」
「よろしくお願いします」
「来週でも３人でお昼でも一緒に食べましょう」
「わかりました」
沢田民江は、急にヒマになった感じがした。
工場では、解体作業が続いているので忙しいし緊張している」

１７２０のお店は、緊急に振られたお誕生日ショコラを勉強しないといけない。
「ポスター１枚と書いてありましたけど３枚にしてください」
急に電話とメールが慌ただしくなった。
１分前には、急にヒマ感に襲われていた。
沢田民江は、割り振りのエクセルを開いて、隣に、ポスター枚数とビラ枚数を記入する欄をつくった。
「ポスター３枚はどこに貼るのですか？」
「お店の前の掲示板に２枚とお店に１枚」
「ビラは何枚ですか？」
「50枚と書いてあったけど」
「できたら１００枚にしてください」
「承知しました」
沢田民江は、今春佐代子に電話をした。
「ポスターだけど何枚頼んだ？」
「１８００枚」
「３６００枚にして」
「まだ増えるかもしれない」
「印刷していいんですか？」
「いい」
「ビラは何枚？」
「１８００の50枚です」
「１８００の70枚にして」
「印刷してもいいんですか？」
「いい」
「請求書は沢田さんでいいんですか？」
「いい」
「まだ数字は変わるかもしれないけど」
「印刷枚数ですか？」
「うん」
「とりあえず３６００枚とビラ１８００の70枚で印刷します」

「見積りもらって」
「沢田さんのとこにメールさせます」
「お願い」
「メールが９件入ってきた」
「この目標は２月21日から１カ月のものですか？」
みんな共通した問い合わせだった。
「各店に割り振ったお誕生日ショコラの数ですが、いつまでの販売目標なのかという問合わせです」
「１カ月の販売目標にしていいですか？」
甘根和人と大野欣二と今井春馬にメールして、慌てて今井春馬の席に向かった。
「すみません～わたしのメールを先に読んでください」
「これでいいです」
「お店は、バレンタインショコラの売り切り企画とは知らないから、定番企画だと思うか」
「ええ」
「２月月末の評判を見て次を考えよう」
「わかりました」
沢田民江は、１７２０店の全店にメールをした。
「先ほどご連絡をしたお誕生日ショコラ１２００の割り振り数ですが、１カ月の販売目標ですので、よろしくお願いいたします」
ＣＣは、甘根和人と大野欣二と今井春馬と秋田勇治と梶功と今春佐代子にした。
ひっきりなしにメールが入ってきた。
「沢田さんもしよかったらどうぞ」
今井春馬が、ハンバーガーセットを持ってきた。
「温かいうちにどうぞ」
「ありがとうございます～いただきます」
まだ電話がひっきりなしにあった。そしてメールもたくさんあった。
三沢印刷からポスターとビラの見積もりがきた。
「佐代子～すごい安いけどいいの？」

「データー待ち込みだから安いんです」
「１７２０店に直接配送にするの？」
「間に合いませんから」
「わかった～いつ？」
「沢田さんが決めてください」
「月曜の夜に発送できる？」
「できます」
「割り振りはわたしがやるから」
「３６００枚とビラ１８００の70枚で終了します」
「動かしたら混乱するかもしれないから」
「わたしがお店の方で調整するから」
「お願いします」
「わかった」
「三沢さんに知らせてください」
「わかった」
「見積もりはＯＫですか？」
「ＯＫ」
沢田民江は、三沢印刷宛てにメールした。
「三沢保さま」
「見積もりの件了解いたしました」
「印刷の数ですが、ポスターを３６００枚にビラを１万２６００枚でお願いします」
「１７２０店の住所とポスターとビラの数は、今日の22時に送らせていただきます。
「１７２０店へのポスターとビラの配送は、17日月曜日夜発送でお願いします」
「急なお仕事をありがとうございます」
沢田民江は、一瞬ヒマになった感じだったのがウソのようになってしまった。
「ポスターとビラの数ですが、今日の21時に締め切りますので、よろしくお願いします」

「ポスター１枚とビラ50枚のままであれば、連絡はいりません」
このメールで、一気にメールと電話が増えた。
いままでのマーケティング本部のやり方は、割り振って連絡なしだったからだ。指示だった。
沢田民江は、社員食堂に向かった。１００円コーヒーは動いていた。
今井春馬が届けてくれたハンバーガーセットを食べはじめた。
「店別の返送数と解体数を送ります」
「８店で沢田さんの一覧表と解体数が違いますが、沢田さんから聞いていただいていいですか？」
「商品在庫を倉庫の方で動かす伝票をつくっていますので」
「終わったの？」
「終わりました～潰れて使えないショコラもなかったです」
「キレイに解体しました」
「わかった～ちょっと待ってて」
沢田民江は、８店の店長に電話をした。全店在庫のチェックをしている。２０１４バレンタインショコラ２５００は、在庫がゼロになっているはずである。
30分かかった。
「佐代子～８店のことだけど」
「解体数の横にコメント欄くっつけたから」
「送り忘れたとかもあるから」
「じゃ～これで在庫動かしていいですか？」
「帳簿上はゼロになるはずだけど」
「８店以外はゼロになるんだそうです」
「わかった～お願い」
「明日からお誕生日ショコラの生産はじまるからキレイにしてます」
「明日わたし工場に行くから」
「お願いします～わたしは５月の旅ショコラ１２００を今井さんに報告しないといけないから」
「わかってる～ガンバって」
「三沢印刷さんは終わったのですか？」

「今日の22時に送り先とポスターとビラの枚数を送ることになってる」
「わたし今日は家に帰りますから」
「お疲れさま」
「沢田さんの作業着は総務で用意してありますから」
「わかった~ありがとう」
「明日わたしのパソコン見てよ？」
「連絡がいっぱいあるんですね？」
「そう」
「わかりました」
沢田民江は、ポスターとビラの数の調整をしていた。
多分21時までかかると思った。いつものカレーショップに走った。
忙しいせいかペコペコである。
「だれかいますか？」
警備のおじさんだった。
「22時までかかります」
「ピッタリでいいですか？」
「22時10分にしてください」
「22時10分にセットしに来ますから」
「お願いします」
もう誰もいないらしい。
21時になって、お店からの連絡はなくなった。
10枚ポスターが欲しいというお店もあった。３枚にしてもらった。
「もしもし~」
「三沢さんですか？」
「遅くまでかかってすみません」
「今から送りますので」
「このエクセルで作業できるかどうか電話をいただけますか？」
「まだ少しいますので」
沢田民江は、１７２０のお店の住所とポスターとビラの枚数を書いたエクセルを送った。
飲み会の日よりも早い時間に帰っているのだが、なかなか寝つけなかった。

明日は工場だからいつもより早い。眠らないといけないのだが、眠りに入れない。
目覚まし時計とケータイアラームをつけて、ホットウーロンハイを飲んだ。
ホットウーロンハイは、先里潤に教わった。先里潤は、１月中ごろ、新橋の博多もつ鍋店で１人で食事をしていた時に隣で１人でモツ鍋を食べていた60歳くらいのおじいさんかおじさんである。
ホットウーロンハイを飲んでいた。ジョッキビールを飲んでいた沢田民江に、冬はホットウーロンハイがグッドだと勧めた人だ。住所はわからないが、どういうわけだかケータイは交換した。
「沢田さんおはよう」
翌日月曜日、沢田民江は、８時30分に着替えをして作業部屋に入った。キレイで清潔な作業部屋である。今日と明日、お誕生日ショコラを12万箱つくる。梶功はすでに作業部屋にいた。
「朝礼を行いますので集まってください」
作業長らしき女性がみんなを集めた。
「昨日と一昨日のバレンタインショコラ２５００の解体のように、今日も衛生的に落ち着いて作業をします」
「今日は品質保証から３名の方に作業をチェックしていただきます」
「商品開発から梶功さんが応援してくれます」
「マーケティングから沢田民江さんが応援してくださいます」
「直接作業しませんのでよろしくお願いいたします」
本社とは違うと思った。
「部屋が14度しかありませんので１時間に15分休憩します」
「それでは作業をはじめます」
「昨日シミュレーションしたそのままです」
昨日と一昨日の作業の人とは異なるようだ。昨日も一昨日も14度の中で作業したのだろう。
「お店から問い合わせです」
「わたしが沢田さんのパソコンから返事していいですか？」
「３月20日以降のお誕生日ショコラ１２００はどうするのですか？」
「23店からきています」

ケータイメールである。
「３月３日頃に連絡をしますにしておいて」
「わかりました」
お昼休みになった。
「もしもし～」
「なに？」
「お昼休みですか？」
「そう」
「寒くてお漏らししそうになりませんでした？」
「佐代子とは違う」
「工場のごはんおいしいですから」
「わかった」
「５月の旅ショコラ今井さんはハンコくれました」
「よかったじゃない」
「21日のマーケティング会議になりました」
「わかった」
「わたしごはんに行きます」
「わかった」
社員食堂で梶功が待っていた。
「沢田さん一緒でいいですか？」
「どうぞ」
マーボ豆腐にお味噌汁にギョーザが３キレついていた。
「沢田さんははじめてですか？」
「ええ」
「作業服も似合います」
「これおいしいですね」
「ギョーザもっと食べたいですけど」
「これどうぞ」
「ああ～そういう意味ではありません」
「２０１４バレンタインショコラ２５００は沢田さんの企画ですか？」
「いいえ」

「だれですか？」
「甘根さんです」
梶功は、やっぱりといった顔をした。
「甘根さんには言ってほしくないんですけど」
「権力あるから数字がメチャクチャです」
「大き過ぎるんですか？」
「誰が見てもそうでしょ？」
「去年20万しか売ってないのにいきなり30万にするんですから」
確かに、沢田民江もそう思うのだが、マーケティングにいて、甘根和人に逆らうことは難しい。
「それでも私は懸命にやりますけど」
「最初から２０１４バレンタインショコラ２５００を20万にしてお誕生日ショコラ１２００を12万で良かったじゃないですか」
「まあ~」
沢田民江は、曖昧な返事をするしかなかった。
「集まってください」
「終礼します」
「17時になって作業長らしい人が言った」
「今日の生産は５万２１００個でした」
「明日は残りの６万７９００個の生産をします」
「慣れない作業で疲れたでしょうが、ゆっくりお風呂に入って休んでください」
「明日も元気に８時に集まってください」
沢田民江は、はじめて工場で作業をした。たいしたことはやってない。手を出すとジャマになる。
しかし、勉強になった。こんなに注意深く商品が作られていることを知らなかった。
翌日２月18日火曜日も、沢田民江は、早く起きて工場へ出かけた。
「沢田さん疲れました？」
梶功はすでにスタンバイをしていた。
「慣れない仕事なので疲れましたけど、お誕生日ショコラができるので楽し

みです」
「お誕生日ショコラは沢田さんの商品ですものね」
沢田民江は、お誕生日ショコラが、自分の商品などとは思ってもみなかった。向井坂治から提案されたものだ。向井坂治の発想力に感心する。自分自身では商品開発などできないと思っている。
思いもかけずに、梶功から、お誕生日ショコラが自分の商品だと言われたことに驚いた。
確かに、お誕生日ショコラは、自分が提案した。向井坂治は、どうぞ使ってくださいになっている。
10時頃だった。甘根次郎が、工場長の幸山巌と一緒にやってきた。
「甘根常務から見てくれと言われました」
「沢田さんの商品だと聞きましたが、会ってみてくれと言われました」
沢田民江は、幸山巌に会うのは初めてだったが、幸山巌は、迷わず沢田民江に近づいた。甘根次郎も、作業長に、作業の内容を聞いている。社長と専務だ。
「お昼を一緒に食べましょう」
「12時になったら私の部屋に来てください」
幸山巌が、出来上がったばかりのお誕生日ショコラを持って、部屋を出て行った。
「お昼を一緒に食べましょうと言われたんですけど」
沢田民江は、梶功に相談した。
「光栄じゃないですか～社員は社長と専務と一緒に食事をすることなどありません」
「甘根次郎さんも幸山巌さんも感覚的に商品がわかってしまう人ですから、もしかしたらと思っているんじゃないですか？」
「もちろん、甘根和人さんが、そう思っているんだけど」
「作業服を着替えるんでしょうか」
「作業服のままで失礼しますでいいんじゃないですか？」
「沢田さんは作業服のままでもキレイだし」
沢田民江は、何かが動きはじめている気がした。この動きはじめたことが、沢田民江にいいことなのかワルイことなのかわからない。

12時になって作業室を出る時、中野由美子が待っていた。
「社長からお連れするようにとのことです」
「作業服のままでいいのでしょうか」
「かまいません」
「手を洗って行きます」
「お待ちしています」
中野由美子は沢田民江と同期に入社した。
同期会ではフツウにオトコの話しをしている。仕事だと仮面が話しているかのようである。
「失礼します」
多分、割烹のお店から取り寄せたと思われるような豪華なお弁当が３つテーブルに置かれていた。
「作業着のままで失礼します」
沢田民江は、上着を梶功にあずけてきた。
「どうぞラクにしてください」
「このお弁当は昔から大事なお客さんの時だけ取り寄せているものです」
「先代の時からです」
幸山巌だけが話している。
中野由美子がお茶を煎れてきた。
「どうぞ箸をつけてください」
「いただきます」
「誕生日ショコラよく思いつきました」
「感心しています」
「ありがとうございます」
「最近はなかなかヒット商品が生まれなくて困っていたんだけど」
「ひょっとしたらヒットするかもしれない」
「わたしにはまだよくわかりません」
「２０１４バレンタインショコラが10万個余ったので、その解決策を甘根本部長に指示されただけです」
「必死になってやっています」
「甘根常務も瓢箪から駒だって言っています」

はじめて甘根社長が口を開いた。
「手際がいいと感心していました」
「２月14日の朝に指示したそうだけど」
「はい」
「今日は２月18日だからすごい手際だ」
「ありがとうございますでいいのでしょうか」
「幸山専務も感心しています」
「誕生日ショコラが売れたらどうするのですか？」
「お店からもたくさん問い合わせをいただいています」
「３月３日に判断しようと思っています」
「緊急対策でやってきているのですが定番になるかもしれないので」
「１７２０店のお店の方は定番なのに次の情報がないので問い合わせが来ています」
「もう定番だと思って次を準備しなさい」
「甘根常務にも言っておきます」
「承知しました」
沢田民江は、お弁当をキレイに食べた。朝が早くて朝ごはんも食べていなかった。
お誕生日ショコラの生産は４時に終了した。
「みなさんの手際が良いので早く終了しました」
「ありがとうございます」
「少し早いのですがあがってゆっくりしてください」
「おつかれさまでした」
順調だった。
「梶さんは明日の品質保証のチェックもいらっしゃるんですか？」
「来ます」
「わたしも心配だから来ますので」
「社長と専務はどうでした？」
「お誕生日ショコラの手際を褒めていただきました」
「確かにすごい」
「お誕生日ショコラを緊急対策ではなくて定番で準備をするように言われま

した」
「指示ですか？」
「そうです」
「社長も専務も、感覚で動くから、何かを感じているんでしょうね」
「車だけど一緒に行きますか？」
「わたし電車で帰ります」
「じゃ～また明日」

● 5 月の旅ショコラ
「沢田さんどうしてます？」
「電車～帰り」
「アパートですか？」
「うん」
「明日は？」
「品質保証あるから工場」
「行きますから」
「わかった」
今春佐代子の辛そうな声だった。
沢田民江は、お誕生日ショコラを定番にする企画を今春佐代子と相談したかった。
しかし、なんだか別のことで今晩は埋まりそうだった。
沢田民江は、スーパーに寄って刺身を買った。豆腐とジャガイモとシイタケの味噌汁にする。
「こんばんわ～」
「あんた早いじゃない」
「手伝います」
「お刺身だから平気」
「もうすぐごはんできるから」
「手洗ってきます」
「うん」

２人ともペコペコだった。話しもしないで刺身ごはんを食べた。
「おいしかった」
「お茶煎れます」
「ありがとう」
「なんか話しがあるんでしょ？」
「旅ショコラのことなんです」
「問題発生なんだ」
「５月の旅ショコラのショコラティエ決まっててデザインとか処方やってるんだけど」
「急に、向井坂治さんに頼めって言うの」
「だれ？」
「甘根本部長」
「わたしすごい困った」
「進めてるのね」
「社内のショコラティエ？」
「ううん」
「それはまずいな～」
「商品開発は？」
「守正さん」
「守正飛馬？」
「うん」
「自分でショコラティエやらないの？」
「わたしが大森さんに頼んだ」
「大森美奈子？」
「うん」
「守正飛馬はなんか言った？」
「オレを信用しないんだ」
「そうだろうね」
「デザインだけお願いするからって説得した」
「あんた17日に今井さんにハンコもらったんでしょ？」
「だけど頼んだ」

「マーケティング会議でダメになるかもしれないじゃない」
「21日」
「それでどうなったの？」
「デザインがこれ」
「昨日頼んで今日できたの？」
「すごいデザイン」
「時間がある時にたくさん考えておくらしいんです」
「今井さんに話したの？」
「今井さんに話す前に甘根本部長に呼ばれたんです」
「どうして話さなかったの？」
「このデザインあったんでしょ？」
「その場で向井坂さんに電話したんです」
「甘根さん？」
「わたし達って辛く仕事してますよね」
「それでどうしたの」
「わたし何も考えられなくて沢田さんを待ってたんです」
「困ったね～」
「明日～甘根さんに～実はって話した方がいいと思う」
「甘根さん～２０１４バレンタインショコラ２５００のショコラティエとしての向井坂治さんを買ってると思うの」
「早く話さないとタイヘンなことになる」
「このデザインを見せるの？」
「今春はどうしてこれがいいのかって聞くから」
「明日やらないと向井坂さん仕事早いから持ってくるわよ？」
11時までホットウーロンハイを飲んでいた。
「わたし帰ります」
「明日また電話します」
「甘根さんの結果をすぐ知らせて」
「わかりました」
「大森美奈子さんにゴメンナサイ言わないといけないかもしれない」
「わたしたちって辛いですね」

翌日の19日も、沢田民江は作業着に着替えて８時30分に作業室にいた。
「沢田さんおはようございます」
梶功がやってきた。
「何時からはじまるのでしょうか」
「すぐにやってきます」
「いつもこういうふうにするんですか？品質保証」
「生産中に品質保証のチェックをするから特別に今日のように品質チェックをすることはありません」
「お誕生日ショコラは一旦バレンタインショコラとしてお店に出てるから」
「フツウはすべて廃棄してしまいます」
「そうですね」
「私が見るところですが、うちのお店はシッカリしているから商品に傷がついていたりすることはないと思います」
「バレンタインショコラなどは、お店に数を聞いて参考にしてもいいのではないかと思います」
「マーケティングは、あくまでお店に割り振ろうとしますが」
梶功の言っていることは、マーケティングが少し横暴ではないかとの、お店の意見を代弁していると、沢田民江は思った。
お誕生日ショコラだって、沢田民江が割り振ったカタチになっている。
「おはようございます」
品質保証の人達が５人入ってきて、作業をはじめた。
抜き取り検査である。
どのように抜き取っているのかは、統計的に決めてあるのだろう。サンプルに問題がなければ母集団であるお誕生日ショコラ１２００には問題がないと判断するのだ。
９時30分だった。
「もしもし」
「どうなった？」
「こんなデザインじゃダメだって言うの～甘根本部長」
「一緒に大森美奈子さんのとこに行ってください」
「じゃ～15時以降にアポイントできるか聞いてみて」

「どうやって話すんですか？」

「わかんないけど～時間が過ぎるともっとワルクなる」

お昼になっても品質保証の抜き取り検査は終わらなかった。今春佐代子からも連絡がなかった。

「もしもし～」

今春佐代子のケータイには繋がらなかった。こんなことは１度もなかった。

会議中でさえ、会議中だとメールがきた。

今春佐代子に何かがあったのだと思った。

梶功とトレイを持って並んでいた。

「わたし３時に本社に行こうと思っているんですけど」

「もう終わりました」

「終わったのですか？」

「もう２ヶ所です」

「抜き取りですか？」

ごはんにサバの味噌煮と豆腐をもらった。

「もしもし～」

今春佐代子だった。

「ちょっと待って」

沈んだ声だった。

「大森美奈子さんから呼ばれていままで事務所にいました」

「なんだって？」

「７月の旅ショコラを聞いてほしい」

「ああ」

「それで～謝ったんです」

「すごい怒っちゃって」

「どうなったの？」

「出入り禁止」

「え？」

「池尻製菓とは仕事をしない」

「ものすごいたくさんの仕事をいただいてるらしいんです」

「プライドを傷つけたのね」

「そうです」
「それだけ？」
「それだけってなんですか？」
「お金払ってくれ」
「それは言われなかったんですけど」
「灰皿投げられました」
「わたし掃除しましたけど」
「なんと言われても謝るしかないから」
「ただ５月の旅ショコラが沢田さんとわたしの企画だったのが幸いでした」
「もし大森美奈子さんの企画だったらタイヘンなことになっていました」
「ああ～そうね」
「今日すき焼き買って行きます」
「ああ～焼酎ないから買って来て」
「ウーロン茶も買って行きます」
「わかった」
沢田民江は、少し肩の荷が降りた。
出入り禁止になるのは仕方がないが、上司に言ってデザイン料を支払ってもらうになったら困ると思っていた。
こんなことでマーケティングにいられなくなった先輩を知っている。
「15時に本社に行かなくてもよくなりました」
「じゃ～晩ごはんでも食べにいきましょう」
「晩ごはんを食べに来るガキがいます」
「それは残念です」
沢田民江は、誘われることが多い。軽くいなす術を心得ている。
まさか、梶功が誘ってくるとは思わなかった。
しかし、梶功は、ホントに、おつかれさまのごはんの誘いではないかと思った。
誘ってくれた方がうれしいのかもしれない。
まだ６時なのに、今春佐代子はアパートの前で待っていた。
「おかえりなさい」
「生産できた」

「品質保証はＯＫですか？」
「明日出荷することになった」
「11万９８００」
「２００足りなくなったのをお店に振った」
「売れるといいけど」
沢田民江と今春佐代子は、仕事の話しをしながらすき焼きの用意をした。
「ごはんじゃなくてうどんにしました」
「わかった」
「わたし着替えます」
「すき焼きやっちゃうよ？」
「お願いします」
「こんだけ食べられるかな～」
「平気ですムチャ喰いするから」
今春佐代子は、ホントにムチャ喰いをした。
「まだ焼酎ありますか？」
「残ってたの出すわよ」
「飲み過ぎ～すごい量」
「なにがワルイんだと思います？」
「あんたじゃない」
「先走ったんですか？」
「うん」
「わたしのこと信じてくれない人もワルイんじゃないですか？」
「甘根本部長？」
「自分がゼッタイなんだもん」
「まさかショコラティエまで指示してくるとは思わなかった」
「あんた灰皿投げられてどこか当たったの？」
「ここ～」
太腿にアザができていた。
「大理石の灰皿投げるなんてどうかしてる」
「わたしがケガしたら訴えてやる」
「だけどあんたがワルイんだからね」

「わかってるけど」
「それで５月の旅ショコラどうするの？」
「24日に向井坂治さんが甘根本部長宛てに来ることになったんです」
「相談したいなの？」
「そうです」
「そこで決まるんだね」
「多分」
「わたしたちってなんでしょうね」
「使い走りですか？」
「イヤだったら交替しろ」
「イヤだイヤだ」
「こんなんじゃ～人間ワルクなりますよね」
「目つきもワルクなるし」
「お酒ばかり強くなって」
「あんたダメだよ？太っちゃうよ？」
「瀬戸際だな～」
「あんた今日だけじゃない～たいしたことないわよ」
今春佐代子は、歩くこともできなくなってそのまま眠ってしまった。
「佐代子起きて」
「シャワーしてきて」
「わたし今日お誕生日ショコラ出荷だから本社行かないといけない」
今春佐和子は跳び起きてシャワーに向かった。
「下着新しいのあったから使って」
「すみません」
「沢田さんはシャワーしたんですか？」
「早くに起きたわよ」
「ガンバリます」

●お誕生日ショコラー２

沢田民江と今春佐代子は、８時30分に本社に入った。今日は早朝から、お誕

生日ショコラが１７２０のお店に配送されているはずである。
必ず、なんらかのトラブルがある。足りないとか余るとかまだ到着してないとか、そういうことだ。
11時になって沢田民江は１階のショップを覗いた。
「お誕生日ショコラは来ましたか？」
「３個売れました」
割り当ては１００個のはずだった。
１００個すべてを店頭陳列している。
「電話ありませんね」
「心配だから１階に行って来た」
「届いてました？」
「３個売れていた」
11万９８００個である。１カ月で売れるのだろうか。沢田民江は不安だった。
電話が全くないというのも不安である。
「今日は食堂のごはんにします？」
「うん」
「電話ないから行きましょう」
「わたしお昼からお店回ってみるから」
「あんたここにいて」
「わかりました」
「大森美奈子さんは何も言ってこない？」
「今日は何もありません」
チャーハンに野菜炒めだった。
「おいしい」
「あんた今日はスッキリしてるの？」
「お酒が持って行ってくれたのかもしれないです」
沢田民江は、渋谷の３つのお店を回った。
ショッピングビルにテナントで入っている。
１つのお店はデパートに入っている。
「届きました～もう４個売れました」

「３月20までは品切れになるんですか？」
沢田民江は、渋谷の３つのお店で同じことを質問された。
やはり、甘根次郎と幸山巌に言われたことは正解なのかもしれないと思った。
「お誕生日ショコラは定番だと思って準備しろ」
「もしもし」
沢田民江は向井坂治に電話をした。
「お誕生日ショコラ今日出荷してるんですけど」
「このままだと３月20までには切れてしまうと思うんです」
「今日は売れているんですか？」
「今渋谷のお店を回って思いました」
「17日に工場の生産を手伝った時に、甘根社長と幸山専務とお昼を一緒にご馳走になって言われたんです」
「なんです？」
「お誕生日ショコラは定番だと思って準備しろです」
「ああ」
「24日に今春佐代子の５月の旅ショコラのことでおいでになると聞いたんですけど」
「行きます」
「その時に、お誕生日ショコラの次のことの相談もさせていただきたいのです」
「それはできません」
「どうしてですか？」
「お誕生日ショコラは、私が、沢田さんに差し上げた企画です」
「池尻製菓で話をすることはできません」
「私は、沢田さんに請求書を出しません」
「わたし企画できません」
「渋谷に行きますので待っていてください」
「30分で行きます」
「着いたら電話します」
「わかりました」

沢田民江は、あまり深く考えてはいなかった。確かに、向井坂治に、どうぞと言われた。今春佐代子は、「沢田さんにくれたんだからいいじゃない」と言う。社内のみんなも、お誕生日ショコラは、沢田民江の企画だと思っている。
「これデザインです」
「ショコラのデザインです」
「パッケージもハートを緑にしました」
「お誕生日ショコラー２です」
「いまからはじめたら間に合います」
「どういうことですか？」
「お誕生日ショコラは沢田さんに差し上げたので仕方ありません」
「私にたいした労力がかかっているわけではありませんので、気にしなくていいです」
渋谷の立派な喫茶室だった。沢田民江ははじめてである。確かに、商談をすることに向いている。
「デザインは沢田さんが描き直してください」
「企画書も書いてください」
「申訳ないけどもし売れなくても沢田さんが自分で対策を考えてください」
「わたしは２０１４バレンタインショコラ２５００の１万の対策を沢田さんがとり上げてくれて感謝しているんです」
沢田民江は、そのまま本社に帰った。
「どうしたんですか？」
「渋谷の３つのお店のお誕生日ショコラ品切れする」
「売れてるんですか？」
「今日の夕方もっと売れるんだろうけど」
「佐代子これ見て」
沢田民江は、今春佐代子に、渋谷で、向井坂治にもらった５つの誕生日ショコラのデザインと緑のハートのパッケージデザインを見せた。
「すごいじゃないですか」
「売れそう」
「３月３日には、次はどうするかの返事しますにしてあるから急いだ方がい

いです」
沢田民江は、明日21日の今井春馬のスケジュールを調べた。11時から12時まで空いているようだった。
「明日の11時30分から12時まで時間をいただきたいのですが」
今井春馬にメールした。
沢田民江は、集中して自分のお誕生日ショコラー２の企画書とショコラデザインとパッケージデザインを書きはじめた。
「遅くなりそうですね」
「22時までここでやってる」
「なにか買ってきますか？」
「カレー」
「わかりました」
沢田民江は、22時になってカレーを食べていないことに気がついた。集中していた。ほぼ終わった。
「承知しました」
今井春馬から返事が来ている。
少しの安堵だった。
「まだかかりますか？」
「10分お願いします」
カレーライスは、持って帰ることにした。帰ってもごはんはつくれない。
メモリースティックにお誕生日ショコラー２を移した。
明日の朝11時30分なので、このまま帰っても時間はある。しかし、失敗したこともある。
「急に会議が入ったので、朝１番からやってください」
すごく後悔するのだ。１度あった。
沢田民江は、カレーを食べながら、お誕生日ショコラー２のショコラのデザインを見直していた。どうしても、向井坂治のデザインに比べて見劣りする。細かな修正をする。そしてレシピを書いている。不思議なのは、向井坂治がお誕生日ショコラレシピを書いていることだ。
４つの材料以外はその他になってはいるのだが、モノのデザイナーの向井坂治が書けることが不思議である。

向井坂治は、自分でショコラをつくって書いているわけではないので、池尻製菓のショコラティエが、完成版をつくることになる。
「おはようございます」
「おはよう」
「カレー食べました？」
「帰って食べた」
「ムリすると良くないですよ？」
「わかってる」
「11時30分ですか？」
「いまのところ」
「ガンバってください」
沢田民江は、シミュレーションをやろうと思っていた。
「わたしが聞いてあげます」
「あの小部屋空いてる？」
「空いてます」
「あんたのパソコンも持って行って」
「なんですか？」
「メモリースティックから今井さんのパソコンに移すから」
沢田民江は、自信満々で、今春佐代子に話せたと思った。
「沢田さんが渋谷を回って聞いた話をしないでいいんですか？」
沢田民江は、その場で、スライドを１枚加えた。昨日の渋谷の３軒のお店での、お誕生日ショコラの反応を加えた。
「忘れてた」
「今井さんはお店に行ってないからわからないと思います」
沢田民江は、今春佐代子の言っていることは、何でも聞き入れる。自分の考えとは視点が異なっていて助かっている。
「今井さんとか～緊張感ないからな～どんだけわかってくれるかですよね」
「３月３日にお誕生日ショコラの次の案内すると言ったからな～」
「何もしなかったら甘根さんに怒られます」
「ああ～そうね」
「最近大野部長見ないんですけど」

「メールは出してあるんだけど返事がない」
「どうしたんでしょうね」
「工場行くって言ってた」
「大野部長ですか？」
「甘根さん」
「どういう意味ですか？」
「わかんない」
「工場にいませんでしたけど」
「どうしたんだろうね」
「人事ってわかりませんね」
「今井さんと甘根さんで動けるからな～」
「そうですね」
11時30分になって沢田民江は、今井春馬の机に向かった。
「よろしいでしょうか」
「ああ～どうぞ」
今井春馬は、沢田民江がパソコンを持って来たのを見て、サブテーブルに移った。
「これをお願いします」
沢田民江は、メモリースティックを今井春馬に渡した。
「お誕生日ショコラのことですか？」
「説明させていただいていいですか？」
「どうぞ」
「お誕生日ショコラは２０１４バレンタインショコラ２５００の売り切り企画だったのですが」
「昨日全店に出荷されて、だいたい１店に１００箱配送されています」
「昨日渋谷の３つのお店を回ったのですが、１日だけで、８箱と６箱と５箱売れていて、このままでは早くに切れてしまいます」
「売り切り企画だからいいんじゃないですか？」
沢田民江はア然とした。言葉につまった。こんな質問が来るとは思ってもみなかった。
社長の甘根次郎と専務の幸山巌の話しをここで出したらまずいのだが、甘根

次郎と幸山巌には、お誕生日ショコラを定番にするように指示されている。
「お店では、１カ月の販売目標になっていますので、３月20日までは、切れてもそのままだと思っているのですが、ここまま継続してしてほしいというお店もあります」
「どこだ」
「32店舗からきています」
「一覧を送ります」
「わたしは、３月３日に連絡しますと、全店にメールしました」
「今日の話しは、お誕生日ショコラを継続したいという提案です」
「時間がないから先へ進んでください」
沢田民江は、自分と今井春馬が、目指すものを一致させてないことにガッカリしていた。
今井春馬は沢田民江の直属の上司である。沢田民江のことを誰よりもよく知っていると思っている。
それなのに、工場で、立派なお弁当を一緒にと誘ってくれた甘根社長と幸山専務の方が、目指すことを一致できている。
「お昼から考えて返事をしますから」
沢田民江は、わかりましたとは言わなかった。困ったことになるかもしれないのだ。
もし、「売り切り企画は売り切り企画ですから」と言われたら、甘根社長と幸山専務に指示されたことをどうすればいいのか。
「わたし困った」
沢田民江と今春佐代子は、お昼を食べにハンバーガーがおいしい洋食屋さんに向かった。
話を聞かれたくないのだが、話をしたい状況なのだ。
「こうなるとは思わなかった」
「次のマーケティング会議で話してくれって言われるかもしれないんでしょ？」
「あの話しぶりが気になる」
「ダメだったらどうしようって思ってるんですか？」
「うん」

「甘根本部長はどうなんですか？」
「甘根本部長がお父さんにわたしとごはんを食べてくれって言ったんだから」
「ああ」
「多分、家でもお誕生日ショコラを説明したと思う」
「どうしてわかるんですか？」
「甘根社長も幸山専務も知っていたから」
「お誕生日ショコラですか？」
「生産してるとこ見に来た」
「そしたら甘根本部長に先に話したら良かったじゃないですか」
「わたしどうしたらいいかわかんない」
「お昼休みに～この案を甘根本部長に転送しますがいいんじゃないですか？」
「なに？」
「売り切り企画ごくろうさまでしたと言われたらおしまいです」
「売り切り企画ごくろうさまって言ったら～今井さんのメンツになるか」
「そうです」
「佐代子～ハンバーガーテイクアウトしてきて」
「わかりました」
沢田民江は、走って自分の机に向かった。
確かに時間がない。
「今井春馬　課長」
「このお誕生日ショコラー２の案を、甘根本部長にも転送しました」
短い文にした。
今井春馬も怒りはしないと思った。
「どうでした？」
「送った」
「わたしコーヒー買ってきます」
「お願い」
「わたし達って仕事が辛くなるようにできてるんですよね」
「何もしなくてじっとしてたら何もないわよ」

「それはそれでどこか飛ばされるでしょ？」
「コーヒー買ってきて」
15時まで何もなかった。
「16時に来てください」
いきなり今井春馬から電話があった。
「用意することはありますか？」
「ありません」
沢田民江は、胸騒ぎがした。
「一緒に来てくれ」
沢田民江は、何も言わないで今井春馬の後を歩いた。
社長室の前に来た。
「お待ちしております」
中野由美子が沢田民江に言った。
甘根次郎と幸山巌と甘根和人がいた。
「みんなで沢田民江さんの誕生日ショコラー２を見たんだけど」
「永年のカンでしかないんだけど成功すると思っています」
「経営会議で決まったと思ってください」
「他の経営会議のメンバーには伝えます」
甘根和人が、前置きもなく言った。
「承知しました」
「話しはこれだけです」
「ガンバってください」
甘根和人が言った。
「ありがとうございます」
沢田民江が小さく言って、一礼した。
「うちはオーナー社長いるから他の会社とは違うんですよ」
いつも今春佐代子が言っているのだが、このようなことを言っているのだと、沢田民江は思った。
「お昼休みに甘根本部長に転送した方がいいです」
今春佐代子が言わなかったら、どうなっていたのかと思うと、ぞっとする。
17時だった。

「緊急企画で、経営会議で、お誕生日ショコラー２の進行が決まりました」
「マーケティング会議や商品開発会議のメンバーに結果だけ伝えます」
「マーケティングの担当は沢田民江さんで商品開発担当は赤根百合さんと梶功さんです」
ＣＣが、商品開発部長の秋田勇治と大野欣二と甘根和人になっていた。
マーケティングと商品開発で相談したのだ。
「沢田さん良かったですね」
「あんたがお昼休みにメールしろって言わなかったらどうなってたかわかんない」
「どうするんですか？」
「月曜日に、赤根さんと梶さんと３人で相談する」
「月曜日に向井坂さんが来ます」
「わたしに会わないと思う」
「わかりました」
２月22日土曜日だった。基本的に、沢田民江は休みである。
山手線環内のお店を15店舗回った。
渋谷の３店舗も行ってみた。
「８箱と８箱と今日も多分８箱」
「15日ももたない」
「申訳ありません切らしておりますにしてください」
沢田民江は、ほとんど同じ話しになった。
ワインを買ってナポリタンをつくろうと思った。
「もしもし」
「沢田さんなにかありました？」
「あんた今日はカレなの？」
「ゴルフに行きました」
「ヒマなの？」
「掃除しています」
「どこ？」
「カレの部屋」
「ナポリタンやるから」

「泊めてください」
「じゃ～焼酎とウーロン茶」
「ワインは買ったんですか？」
「買った」
「わかりました」
沢田民江は、今春佐代子が来るまで、山手線環内のお店の訪問記録を書いていた。
月曜の、梶功と赤根百合との打ち合わせで話そうと思った。
「掃除と洗濯でペコペコですよ」
「なんでパンツとジーパンと一緒にそこらへんに脱いでるんでしょうね」
「知らない」
「冷蔵庫もすごい臭いするし」
「掃除したの？」
「家政婦ですよ」
「止めれば？」
「そういう意味じゃないから」
「わたしにはわかんない」
「ナポリタンまだですか？」
「ジャガイモサラダ先にやってんだから」
「ワイングラス出していいですか？」
「うん」
「え～そんなにサラダつくってるんですか？」
「どうぞ～先に食べてて」
「待ってます」
「ワイン飲みながらやるから」
「ああ～どうぞ」
沢田民江と今春佐代子は、少しの安堵があって、ワインを飲み干してホットウーロンハイを飲んだ。
「もう焼酎ないから寝る」
今春佐代子は、そのままソファーをベッドにして眠ってしまった。
アッと言う間だった。

沢田民江も、ケータイアラームをかけてベッドに入った。３時になっていた。
なんの話しをしたのかわからない。次第に仕事の辛い立場の話しが多くなっている。ワルクチが多くなっている。
沢田民江は、８時に起きて器を洗った。今春佐代子も起きてきた。
「さっき寝たばかりじゃない」
「だけどスッキリしてる」
「ホットウーロンハイのせいだよね」
「先里潤さんですか？」
「うん」
「ワル酔いしないですもんね」
「うん」
「わたしコーヒー煎れます」
「お願い」
２月24日だった。
「処方細かく書いてないから」
「わたし処方書けません」
赤根百合の方が沢田民江より年上である。
赤根百合は、２０１４バレンタインショコラ２５００のショコラティエをやった。もちろんデザインは向井坂治である。
今度のお誕生日ショコラ１２００－２のショコラのデザインは、沢田民江であると思っている。
「わたしに任せてもらえますか？」
「このデザインからは離れるかもしれないけど」
「緑っぽいという今回のコンセプトは守ります」
「よろしくお願いします」
「沢田さん～数字はどうするんですか？」
「お誕生日ショコラ１２００－２は、３月21日～４月20までで12万箱できればいいと思っているんですけど」
「足りなかったらお誕生日ショコラ１２００－３まで品切れで」
「お誕生日ショコラ１２００－３も考えるんですか？」

「ええ」
「売れなくなったら終わりですか？」
「ええ」
「わたしは～とにかくこの５つのショコラを試作してみます」
「コンセプトは緑のハートで」
「よろしくお願いします」
「ちょっと待ってください」
梶功が話を切った。
「お誕生日ショコラ１２００ー２は３月20日に店頭に並ぶんだけど」
「桜の季節です」
沢田民江は、まずいと思った。
「わかりました」
「お誕生日ショコラ１２００－２のコンセプトは桜にしましょう」
「お誕生日ショコラ１２００－３のコンセプトを緑にしましょう」
沢田民江は、簡単に変更した。
もともと、自分自身がクリエイティブだとは思っていない。誰にも言えないが、お誕生日ショコラのアイデアは、向井坂治にプレゼントされたものだ。
「じゃ～お誕生日ショコラ１２００－２桜とお誕生日ショコラ１２００－３緑のコンセプトシートを書いてくれますか？」
「商品企画書も２つ書いてください」
「上の方の承認もとってください」
「わかりました」
沢田民江は、梶功に感謝した。確かにそうだ。３月20日出荷だから桜がふさわしい。だれも反対しない。
「向井坂さんが来てますけど」
「わかった」
「いいですか？」
「わたし至急にやんないといけないことがある」
「わかりました」
沢田民江は、今日中にやらないといけないと思った。今日は24日である。
ハートに桜をあしらうことに手間取った。デザインがダサイ。そもそも、

ハートに桜は似合わない。西洋に日本という感じがしてしまう。

沢田民江は焦った。

「向井坂さん帰りました」

「５月の旅ショコラできたの？」

「これ見てください」

「なんでアイガーなの？」

「ホワイトチョコ主体にやるから」

「向井坂さん？」

「そうです」

「この鉄道なんて言うんだっけ」

「ユングフラウ鉄道です」

「わたし～安曇野の旅とかにするのかと思った」

今春佐代子は返事をしなかった。

「佐代子ちょっとこれ見て」

「桜にするんですか？お誕生日ショコラ」

「お誕生日ショコラ１２００－２桜」

「お誕生日ショコラ１２００－３緑」

「いいじゃないですか～」

「ハートのさくらが描けない」

「ハートはハートだからピンクにすればいいんじゃないですか？

「桜色のハートか～」

「バックを桜にしてピンクのハートは浮かせて」

「わかった」

「緑は葉桜がいいです」

「ごはん食べに行きますけど」

「テイクアウトしてきて」

「社員食堂です」

沢田民江は、仕方ないといった感じで立ち上がった。

沢田民江は、葉桜はグッドだと思った。

今春佐代子は、自分よりクリエイティブだと思ってしまう。

ふわふわ親子ドンブリだった。

「向井坂さんと食事行かなかったの？」
「甘根さんと外出しました」
「どこかで食事するんだね」
「ええ」
沢田民江は、素早くふわふわ親子ドンブリを食べた。
「もう食べたんですか？」
「わたしやんないといけないことがある」
「コーヒー買って行きます」
「先に行く」
「わかりました」
16時になった。沢田民江は必死になって企画書を書いた。パッケージのデザインをした。
「佐代子これ見て」
「すごくいい」
「見てない」
「チラチラ見てました」
「今井さんいる？」
「社長とか全員にメールで知らせないとメンドーなことになります」
「え～」
「また今井さんが握っちゃったらどうするんですか」
「勇気を出して」
沢田民江は、今春佐代子の方が先輩ではないかと思う時がある。
「これでいいです」
10分もしないうちに、甘根和人から返事がきた。ＣＣが、甘根次郎と幸山巌と今井春馬と秋田勇治になっていた。
「大野さんどうしたんだろうね」
「知りません」
沢田民江は、梶功と赤根百合に、企画内容をメールして、雨根和人の返信も転送した。
「承知しました」
「了解」

「佐代子～わたしあんたがいなかったらメチャメチャになってるかも」
「なにがですか？」
「感謝してるの」
「それはどうも」
「もう帰るんですか？」
「うん」
「わたし５月の旅ショコラの店頭ＰＯＰやらないといけないから」
「先に帰る」
「おつかれさまでした」
沢田民江は、電車の中で、大きな安堵に襲われていた。毎日毎日、大きな不安に襲われる日もあるし大きな安堵に見舞われる日もある。荒波のような毎日である。
ほぼすべてが、上の人達の考えの不一致によるものだ。
「わたしたちって辛く仕事をするようになってるんですよね」
今春佐代子が１日に１回は言うとおりである。
今日もまた、ウーロン茶と焼酎を買った。
「沢田です」
「東京駅にいるんですけど」
「大阪のお店見てきたいんですけどいいですか？」
「急で申し訳ありません」
沢田民江は、朝シャワーをしていて思い立った。
沢田民江は、渋谷のオンナを頭に描いている。いつもである。しかし、池尻製菓のお店は、名古屋にも多いし大阪にも多い。
渋谷のオンナが、１２００円のお誕生日ショコラを、オンナ友達であろうがカレシであろうが、プレゼントすることは、容易に理解できる。
しかし、難波のオンナも同じようにするのだろうか。よくわからないまま、難波のオンナを渋谷のオンナと同じ人だと思ってやってきた。
そもそも、難波のお店では渋谷のお店のように、お誕生日ショコラが売れているのだろうか。
「こんにちわ～マーケティングの沢田です」
「お誕生日ショコラはどうでしょうか」

「もう20箱しか残っていません」
沢田民江は驚いた。20日に配送して、21日から店頭販売をしているはずである。今日は25日である。
「１日20個くらい売れているのですか？」
「明日で切れるので代わりのケーキを発注しました」
「大阪の人って～フィットするのですか？」
「合理的です」
「合理的って？」
「１２００円でちょっと見栄えがいい」
「切れるのはいいんだけど次はどうなるんですか？」
「３月３日に連絡します」
「１カ月に１００しかなかったんだけど」
「余るより少ない方がいいです」
「お店で調整します」
「みなさん賞味期限を見ますか？」
「当然です」
「新鮮じゃないと買わないんだ」
「そうです」
沢田民江は、アメリカ村のお店でも同じことを聞いた。心斎橋のお店もである。
沢田民江は、そのまま名古屋に向かった。
意外だった。
沢田民江は、急いで栄の２つのお店に急いだ。
「こんにちわ～」
「マーケティングの沢田民江です」
「お誕生日ショコラはいかがでしょうか」
「今日で切れます」
「もう５箱しかないので」
沢田民江は驚いてしまった。
「名古屋のオンナは便利だと思います」
「１２００円で少しグレードが高いからですか？」

「かっこうがつきます」
「便利なんです」
「いつも探していますから」
「同じお誕生日ショコラを来年もというのはないんですけど」
沢田民江は、いろいろなことがわかったと思った。今やっているように、お誕生日ショコラ１２００－３というように、毎月変えることが好ましい。
毎月変えるのはいいのだが、アイデアが尽きてしまうのではないかと思った。自分にはできない。こんなことを向井坂治に頼めるのだろうか。
断られそうである。
２月27日になった。
「お誕生日ショコラ１２００－２桜の試作ができたので食べてみてください」
沢田民江と梶功は、急いで、商品開発の小部屋に集まった。
外見上のデザインは、沢田民江のデザインのとおりだった。
「桜味を加えましたが多くするとショコラらしくなくなります」
「パッケージはわたしの切り貼りです」
「どうですか？」
「こっちは食べてみていいですか？」
「どうぞ」
「色が薄くなっているのは桜ですか？」
「ココナツの種類です」
沢田民江はワルクないと思った。
「梶さんどうですか？」
「ワルクない」
「これだと、お誕生日ショコラ１２００とかなり違うから、プレゼントに選びやすいかもしれない」
「選ぶ側の感じ方です」
「別の人だけど同じものを選びたくないのですか？」
「多分」
梶功の、こんな話をはじめて聞いた。確かに、そうかもしれない。すごい有名ブランドだったら、同じでもいいかもしれないが、１２００円ではないだ

ろう。
「整理して今井さんと話しますから」
「明日のマーケティング会議の議題にしていただきます」
「よろしくお願いします」
「試作品はこれだけですか？」
「みんなに食べてもらうほどはありません」
「10箱は今日中に用意できます」
「わかりました」
沢田民江は、またもや忙しくなった。
「佐代子～これ食べてみて」
「お誕生日ショコラー２ですか？」
「桜」
「１つしかない」
「色が少し抜けてていいんじゃないですか？」
「おいしいです」
「かすかに桜の匂いがします」
「今井さんいる？」
「います」
沢田民は今井春馬のスケジュールを調べた。
「14時30分から30分いただけないでしょうか」
「お誕生日ショコラ１２００ー２桜のことです」
「わかりました」
「30分にしてください」
「承知しました」
「佐代子～なんかテイクアウトしてきて」
「まだ11時です」
「お昼になったら」
「カレーでいいですか？」
「うん」
沢田民江は集中してお誕生日ショコラ１２００－２桜の店頭ポスターとＰＯＰの案を書いた。そして１７２０店舗への12万箱の割り振り表をつくった。

大阪を厚めにした。
「梶さんすみません～概算でいいのですがコストわかりますか？」
「百合さん忙しいから私が概算します」
「よろしくお願いします」
「１時間ください」
「わかりました」
沢田民江は、ポスターに苦労した。ＰＯＰのアイデアが出なかった。
「わかんない時はバックを桜の花だけにすればいいと思いますけど」
頭を抱えている沢田民江を見て、今春佐代子が言った。
「ワルイ～ありがとう」
「カレー買ってきます」
「お願い」
「原価は３５０円です」
「多少動きます」
「１２００円で売るので、８５０円は限界利益になります」
「マーケティング本部の計算方式ですと、１７２０店のお店負担が50％ですので６００円です」
「６００円から３５０円を差し引くと２５０円残ります」
「２５０円の12万ですので、３千万残ります」
「グッドではないでしょうか」
「赤根百合子さんのコスト意識が素晴らしい」
沢田民江は、14時になってもカレーを食べなかった。
「パワー出ませんけど」
「今井さんとの話し終わって食べるから」
ギリギリまでやっていた。
「よろしくお願いします」
「どうぞ」
沢田民江は、お誕生日ショコラ１２００－２桜の企画書を修正した計画書を説明した。
コスト計算もできている。販売価格も決めて、販売スケジュールも決めた。
３月20日出荷で、４月20までの１カ月の販売期間で、数字は12万箱であ

る。１７２０店の各店の多い店で１００箱である。ポスター案とＰＯＰ案と販売マニアルを
説明した。
「明日10時からのマーケティング会議で説明してください」
「明日10時までに生産スケジュールを出してください」
今井春馬の一言だった。
「明日10時のマーケティング会議で説明することになりました」
「梶さんすみません、生産スケジュールをマーケティング会議で説明しないといけません」
「よろしくお願いいたします」
梶功と赤根百合にメールをした。
「カレーチンしてきました」
「ありがとう」
「今食べてください」
怒っていそうな今春佐代子を見て、沢田民江は、スプーンを持った。
「おいしい」
「あんたの方は平気なの？」
「ギリギリです」
「出荷日は？」
「３月20日」
「え～お誕生日ショコラ１２００－２桜とおなじなの？」
「そうです」
「ワルイ～わたしのことばかり手伝わせて」
「試作あったら食べさせて」
「どうぞ」
「ホワイトなんだ」
「だからアイガーなのね」
「ええ」
「ホントに氷のショコラなんだ」
「明日のマーケティング会議で話すの？」
「ええ」

「数字は？」

「平均３００箱を振りました」

「50万箱なの？」

「連続生産やります」

「５月20日までの目標です」

「２か月か」

「ええ」

「ワルイ～お誕生日ショコラばっかりに目がいってて」

「平気なんです～向井坂さんが守正飛馬さんと相談してくれてますから」

「わたしはヒマなんです」

「ポスターとかも向井坂さん？」

「ええ」

「向井坂さんってすごいね」

「ヒットメーカですよね」

「お誕生日ショコラの最終案送る」

「５月の旅ショコラ１２００も送ります」

「５月の次は７月なの？」

「その予定です」

２月28日の夕方だった。

「沢田さんヒマですか？」

「合コンのメンバー？」

「向井坂治さんです」

「ダメだわよ～佐代子が誘われたんだから」

「でも沢田さんはファンでしょ？」

「そうだけど」

「わたし～遅くなれないんです」

「なんで？」

「カレが待ってるから」

「でもイヤだ」

「向井坂さん佐代子と２人のイメージだと思うから」

「わたしはイヤだ」

向井坂治

●今春佐代子と向井坂治

「あんたどうしたの？」

３月３日だった。沢田民江と今春佐代子は今日も忙しい。おひなさまショコラをやっている。担当ではないのだが、手伝わないといけない。

「カレに殴られた」

マスクをしているが右の唇が腫れている。

「なんで～」

「向井坂さんのマンションに行って遅くなった」

「マンション？」

「事務所」

「事務所に住んでるのか」

「デザイン賞たくさんもらっているって言うから見に行った」

「寝たの？」

「危ないとこまでいって遅くなった」

「よく帰れたね」

「酔っててギリギリ」

「なんでカレに見つかったの？」

「ソウル出張予定だったの」

「え～」

「７回も電話来てた」

「オトコだって言われて」

「殴られたのか」

「飛行機ギリギリだったから～殴ってすぐ出て行った」

「バカだよ～あり得ない」

「事務所で賞状とか見てすぐに帰る予定だった」

「まだ７時半だったし」

「何時までいたの～」

「10時」
「２時間半もいて何もないの？」
「キスした」
「それだけなの？」
「シャワーしてる時に帰った」
「なんで～」
「沢田さんにワルイと思ったんだけど～ステキです」
「これからどうするの～仕事仲間じゃない」
「28日のことはなかったことにしてくださいってメールした」
「わかりましたって返事きたから」
「カレは？」
「ソウルからまだ帰ってない」
「連絡ないかもしれない」
沢田民江と今春佐代子は筆談をした。
「沢田さん～新宿のお店お願いしたいんですけど」
「お昼からお願いします」
「わかりました」
「わたしは？」
「花粉症ですか？」
「マスクはとれませんか？」
「ええ」
「じゃ～いいです」
「わたし１７２０のお店にお誕生日ショコラ１２００－２桜の連絡しないといけないから」
「お昼って13時からですか？」
「12時じゃない～忙しいんだよ～お昼時」
「じゃ～やってください」
「５月の旅ショコラ１２００は？」
「お昼から連絡書出します」
「わかった」
15時だった。

「佐代子ゴメン」
「なんですか？」
「わたしのメール見て」
「見てますから平気です」
「質問とかあった？」
「ありますけどわたしでわかるものばかりです」
「５月の旅ショコラ１２００は連絡書出したの？」
「今から出します」
「わかった」
「新宿はどうですか？」
「おひなさまで賑わってる」
「昨日混乱したらしいの」
「ああ～また電話する」
結局、沢田民江と今春佐代子は、沢田民江のマンションでごはんを食べることになった。
「わたしたちのおひなさまね」
「なにがいいですか？」
「おでんにします？」
「わかった」
「つくり過ぎちゃうから明日もおでん食べてください」
「うん」
沢田民江は、今春佐代子のマンションには行ったことがない。
カレがいつ来るかわからないからだ。自分勝手なカレだから危ないと思っているのだ。
「沢田さん紹介したくない」
「美人だから危ない」
今春佐代子は、いつもこう言う。
「わたしなんかゼンゼンモテないし何もないわよ」
しかし、今春佐代子は、オトコの沢田民江を見る目線に気がついている。
「佐代子～カレに電話したの？」
「繋がらないんです」

「まだソウルにいるの？」
「わかりません」
「マンションに行けばいいじゃない」
「昨日行ったけどまだ帰ってそうもなかった」
「怒ってるんだよね」
「７回も電話あって気がつかなかったの？」
「わたしおかしくなってて気がつかなかったんです」
「食べよう？」
「どうします？」
「なにが？」
「最初はビールでいいですか？」
「１杯だけ」
「わかりました」
沢田民江と今春佐代子は、ついつい向井坂治の話しになってしまうことに気がつかなかった。
どんな賞をもらってたのかを沢田民江は聞いてしまう。
「額が15くらい飾ってあった」
「盾が20くらいあった」
「凄いことは凄いんだ」
「グッドデザイン賞も２回あるんだって」
「話し聞いてたんだ」
「みんな反対したのを振り切ってやらないとデザイン賞なんかとれないらしい」
「グッドデザイン大賞なの？」
「大賞は１年で１人だから難しいらしい」
「電話じゃないの？」
今春佐代子はトイレに立った。
「ホットウーロンハイだからわかんないですか？」
「カレなの？」
「羽田だって」
「何しに行ったの？土日で」

「コンベンションセンター」
「よかったね～もう連絡なくても仕方ないわよ」
「このままでいいですか？」
「明日半休だろうね」
「わかりません～また殴られるかもしれない」
３月４日だった。
「佐代子おはよう」
「おはようございます」
「大丈夫？」
「キムチのおすそ分け」
「一緒にマンション出ました～早くに」
「泊まったんだ」
「スーツ置いてあるから」
「殴られなかった？」
「グッドデザイン賞の凄いオトコだって話したら襲われたんです」
「小さい声で話して」
「もう会わないって約束しました」
「でも仕事仲間じゃない」
「仕事で会うのは仕方ないけど」
「わたしよくわかんないわよ」

●お誕生日ショコラー２と５月の旅ショコラ

何事もなく３月20日になった。
「沢田さん１階に来てください」
「なんなの？」
「来たらわかります」
10時30分だった。
お誕生日ショコラ１２００－２桜と５月旅ショコラ１２００のポスターがデカデカと貼ってあった。そしてショコラが並べてあった。
「思ってたより桜のハートって良かったですね」

「嫌味がない」
「もう１つ売れましたよ？」
「アイガーもいいね」
「桜とアイガーが被ってないからいいです」
「わたし上野に行ってみる」
「わたし池袋」
「わたしこれから上野のお店に行きますけど、生産とか何か問題がありますか？」
沢田民江はケータイメールを、梶功と赤根百合にした。
「何もありません順調です」
「順調です」
アッと言う間に返事が来た。
「お誕生日ショコラはどうでしょうか」
「今日は２つ売れています」
「４月20日までですか？」
「そうです」
「特に桜だし４月の桜の頃に切れると思います」
「旅ショコラはどうですか？」
「こっちは連休が近くにならないと動かないかもしれません」
沢田民江は、なるほどだと思った。
沢田民江はそのまま渋谷に向かった。やっぱり渋谷の３軒のお店がわかりやすい。
「こんにちわ～」
「お誕生日ショコラどうでしょうか」
「５月の旅ショコラどうでしょうか」
「もう売れています」
「桜がピッタリです」
沢田民江は、すぐに自分の机に帰った。お誕生日ショコラ１２００－３をやろうと思ったのだ。
お誕生日ショコラは、どこかでアイデアが切れるのだろうが、お誕生日ショコラー３は緑のハートにすることにしている。

「葉桜だから」
帰ってきた今春佐代子が言った。
「ネットから探します」
今春佐代子はアッと言う間に探し出してくれる。
３月24日だった。梶功と赤根百合と沢田民江は、お誕生日ショコラ１２００－３葉桜のことで集まった。
やはり日本のオンナはさくらが好きだというのは、まだ出荷して５日目なのだが、はっきりしている。このままだと、今年は桜の開花が遅くなりそうなので、桜が開花するまでに、お誕生日ショコラ１２００－２桜が品切れてしまうのではないかと心配している。
沢田民江は、品切れても同じものを生産する気はない。
「葉桜でさわやかさを出したかったのですが、どうでしょうか」
「桜は好評ですし、続きということで」
「いいと思います」
「数字はどうしますか？」
「12万のままでいきます」
「１カ月の半分くらい品切れですけど」
「桜が凄かったんだと思います」
「葉桜はそうはいかないから」
「それはそうだ」
赤根百合は、葉桜のショコラの試作をはじめた。梶功は、葉桜のパッケージの相談に、半田紙業に向かった。
沢田民江は、必死になって、お誕生日ショコラ１２００－３葉桜の企画書を書いた。ポスターとＰＯＰの案を考えた。
「佐代子は明日どうしてるの？」
「５月の旅ショコラのキャンペーンです」
「直行？」
「来ます」
「朝30分くれない？」
「なんですか？」
「お誕生日ショコラ１２００－３葉桜の企画書とポスター」

「じゃ～今見ます」
「今晩中につくる」
「じゃ～明日の朝８時半に来ます」
「わかった～ありがとう」
「自信がないんですか？」
「佐代子の方がわたしよりセンスあるから」
「わかりました」
沢田民江は、また22時になって、守衛さんが巡回に来るまでガンバった。
「５分で帰ります」
「よろしくお願いします」
「上の階を回ってきます」
帰って少しやらないと明日の８時30分には今春佐代子に見てもらわないといけない。
駅のコンビニでお弁当を買った。
ノンアルコールのビールを買った。
「４月20日出荷のお誕生日ショコラ１２００－３葉桜まではいいんだけど～５月20日出荷のお誕生日ショコラー４をどうするかですね」
「今春佐代子は、そう言って出かけて行った」
「今井春馬さま」
「お誕生日ショコラ１２００－２桜は好調です」
「かなり早い時期に品切れになると思われます」
「次のお誕生日ショコラ１２００－３葉桜が遅くならないように、早めにはじめようと思います」
「11時30分から30分いただけないでしょうか」
「承知しました」
すぐに返事が来た。
「28日の金曜のマーケティング会議の議題にしてください」
「沢田さんが説明してください」
「わかりました」
「お誕生日ショコラー４も考えておいてください」
今井春馬は、今春佐代子と同じことを言った。今のところアイデアなどな

い。
３月28日になった。
「お誕生日ショコラ１２００－３は葉桜は、４月20出荷で12万箱です」
「遅れないように生産に入ってください」
今井春馬は、淡々と結論だけを言った。誰も反対する人はいなかった。
「佐代子～あんた７月の旅ショコラ考えたの？」
「わたしは考えない」
「どういうこと？」
「考えるのが向井坂さん」
「ああ～いいな～甘根さんがお金払ってくれるんだ」
「いくら払ってるかわかりませんけど」
「請求書もらってないの？」
「甘根さんに出してるらしいんです」
「いくらなんだろうね」
「わかりません」
「７月の旅ショコラ～やんないといけないよね」
「５月の旅ショコラはまだはっきりしてないから」
「向井坂さんからは案が来てるんだけど」
「見せて」
「これです」
夏のニースだった。何でもが白くて砂だって白い。
「お誕生日ショコラと被らないな～」
「ええ」
「凄いな～向井坂治」
「わたしどうしよう～またアイデアくれないかな～」
夕方５時だった。
沢田民江は、向井坂治と渋谷にいた。

●お誕生日ショコラ１２００－４紫陽花
「今春佐代子の７月の旅ショコラ見ました」

「まだ甘根さんには見せていないから困る」
「誰も知りません」
「素晴らしい」
「ありがとう」
「お願いがある」
「お誕生日ショコラ１２００－３葉桜をやっています」
「多分うまくいく」
「４月20日の出荷です」
「お誕生日ショコラ１２００－４をどうするか困っている」
向井坂治は、伝票を持って席を立った。
「どうぞ」
沢田民江は、何が起るかわかっていた。
「どうぞくつろいでください」
今春佐代子に聞いていたとおりだった。壁に賞状がずらりと並んでいた。盾も無造作に棚に置いてあった。
「ちょっと待ってください」
向井坂治は、正面の扉から向こうの部屋に入った。
３分くらいだったら、沢田民江には、すごくながく感じられた。
「どうぞ」
沢田民江は、向井坂治が示した写真を見て驚いた。
紫陽花だった。淡白い紫の紫陽花が雨に打たれていた。
お誕生日ショコラ１２００－４は５月20日の出荷である。梅雨間近である。もしかしたら雨の日も多くなっているかもしれない。
「どうぞお持ちください」
沢田民江は、向井坂治を見た。
今春佐代子はキスをされた。自分には魅力がないのだろうかと思った。
「どうぞお持ちください」
沢田民江は、イスのコートとバッグを持った。
「これを使ってください」
向井坂治は、アジャスターケースを持ってきて、紫陽花の写真を丸めて入れて、沢田民江に手渡した。

「どうぞかまいません」
向井坂治は、早く帰ってくれと言わんばかりだった。
ほんの10分しかいなかった。
今春佐代子の話とは大違いだった。
「佐代子~これ見て」
「どうしたんですか？」
「渋谷で向井坂さんにもらった」
「会ったんですか？」
「なんかヒントがないかと思って」
「お誕生日ショコラー４ですか？」
「そしたらこれくれた」
「部屋に行ったんですね？」
沢田民江は黙っていた。
確かに、向井坂治が、あらかじめこの写真を持ってくることには説明がつかない。
「寝たんですか？」
「沢田さんカレいないしいいですけど」
「10分もいなかった」
「これくれただけ」
今春佐代子は、すごく不思議な顔をした。
「ワインも勧められなかったんですか？」
「早く帰ってくれって感じだった」
「不思議」
「それはいいけどこれ見て」
「紫陽花にするんですか？」
「これ見た時、心が跳び上がった」
「確かにすごいです」
「７月旅ショコラ１２００ニースはまだ企画書も書いてないんだろうけど~お誕生日ショコラ１２００－４紫陽花と同じタイミングだよね」
「ええ」
「向井坂さんって~いいセンスしてる」

「そうですね」
「またいただいていいのかな～」
「どうぞって言ってくれてるんだから」
「それに～旅ショコラでいっぱい請求してると思うから」
「わかった」
沢田民江は、今春佐代子には、向井坂治の事務所に行ったことは話さないつもりだった。しかし、どうしてもつじつまが合わないのだ。
今春佐代子が向井坂治にキスしたのか、向井坂治に今春佐代子がキスされたのか、聞きたかったのだが、話せなかった。それに、シャワーしてる時に逃げ帰ったと言っていたが、そのままベットのつもりだったのだろうか。
７回もカレから電話があっても気がつかなかったのだ。
沢田民江には考えられない。
「なんか要求される前に晩ごはんでもご馳走した方がいいんじゃないですか？」
「あんた一緒に来て」
「わかりました」
お誕生日おショコラ１２００－３葉桜は、４月10日なって生産がはじまった。12万という数は、多いようでも、工場生産では、なんでもない数である。
ショコラは、あらかじめ生産してある。
沢田民江は、工場にいた。
「最初の３箱だけど」
「３人で食べてみましょう」
「お昼食べられなくなるけど」
梶功が３箱持ってきた。
沢田民江と赤根百合は、生産を手伝っているわけではない。本生産のお誕生日ショコラ１２００葉桜を食べてみないといけないと思っているのだ。
「沢田さんのイメージとどうですか？」
「もう少しサラッとしてると思ったけど～これはこれでいいと思う」
「葉桜に包まれてるこれ～いいしおいしい」
「ゼンブ葉桜にすれば良かったですか？」

「ううん～５つがゼンブ違うからいい」
「沢田さん～帰りに早いけど３人で祝杯をあげませんか？」
赤根百合が言った。
「梶さんは都合はどうですか？」
「平気です」
「じゃ～駅の近くの居酒屋で」
沢田民江は、あまり居酒屋で飲んだことがない。
最近は、コンプライアンスとかでウルサくて、上司とも食事には行かなくなっている。池尻製菓は女性社員が多い。男の上司も、敬遠気味である。
沢田民江も、上司に誘われたことがない。
同期のオトコ達には誘われる。１週間に１度は誘われて、半分は断っている。
「わたし～沢田さんより早く会社に入ってるんだけど～沢田さんが先輩に見える」
「ウソです」
赤根百合は、沢田民江に感謝しているのだ。ショコラティエとして、グッドなテーマをもらってしまったのだ。
赤根百合は、梶功にも感謝していた。赤根百合には、パッケージの手配などできない。生産の調整などできない。
４月11日だった。すでに桜の季節は終わって、浮かれた雰囲気は少なくなっている。お誕生日ショコラ１２００‐２桜は、お店から消えていた。売れてしまってポスターも貼っていない。
お誕生日ショコラ１２００‐３葉桜の生産がはじまっていて、４月20日には出荷されることになっている。
沢田民江は、池尻製菓のお店を回っても、自分が関与している商品が陳列から消えているので、気が入らない。
「今渋谷にいますが、時間があったらデザインの話などいかがかと思いまして」
向井坂治からのメールだった。
沢田民江は渋谷の３軒のお店をまわったところだった。お誕生日ショコラー２桜は、もちろん、陳列されてはいない。商品が品切れている。

●デザインを勉強したい
「もしもし」
「どうしたんですか？」
「佐代子わたし調子よくないからこのまま帰るから」
「どこにいるんですか？」
「渋谷」
「わかりました」
どうしてウソをついたのか、自分でもわからない。気分などワルクない。
「たまたま同じ場所にいて幸いでした」
10分後には、この前に会ったカフェにいた。沢田民江と向井坂治である。
「もう5時過ぎてるしワインにしますか？」
「じゃ～赤を」
「子牛とジャガのなんとか風ソティーを一緒に食べますか？」
「わかりました」
「野菜スティックもいいですか？」
「ええ」
オンナ連れには慣れている感じだった。嫌味もない。特別にグレードを上げようとしている雰囲気もない。
「沢田さんはデザイナーですか？」
「わたし堅物で食物です」
「キレイだしセンスいいしショコラティエやるのかと思ってました」
「今は～マーケティングにはまろうとしています」
「でも何もわからないから困ってます」
「でも沢田さんの商品は売れますけど」
「向井坂さんからいただいたものです」
「理解できなかったら受け取れませんから」
「わたしにはショコラティエはできない気がします」
「私には堅物のことができない気がします」
「処方とか栄養計算ですか？」
「そうです」

「難しくはありません」
「デザインも難しくはありません」
「デザインってなんですか？」
「斬新です」
「人は見慣れると斬新さを感じなくなります」
「お誕生日ショコラー４の紫陽花は素晴らしいと思いました」
「沢田さんにとって斬新だったからです」
どういうわけだか、ワインが３杯目になっていた。頼んだ覚えはないのだが、少なくなると持ってくる。
「デザインは難しくないと言うことだったのですが」
「わたしでもできますか？」
「少しくらいデザインのことがわかった方が仕事に役に立つし楽しいと思います」
「10分でできる方法があります」
向井坂治は、コートを持ってくるように頼んだ。沢田民江のコートもだ。
「どうするのですか？」
「10分でデザインがわかるようになりますから」
沢田民江は、向井坂の事務所に行くのだと思った。まだ19時になっていない。10分でわからなかったら帰りますと言えばいいと思った。
「私が講師をしているデザイン学校で話してるものです」
いきなり、ＰＣスライドを白い壁に写しはじめた。
「デザインは色とカタチです」
「カタチの話しはまた今度にします」
「10分しかないので」
「これは海の生き物です」
「すごく多彩です」
「自分の存在を色で表現しています」
「こんなのすごい色をしていると捕食されるのではないかと危惧します」
「そのことよりも存在がないかのように見えることの方が怖いのです」
「これは鳥です」
「みんなすごい色をしています」

「同じ理由です」
「人は視覚が進化していますからこんなに素晴らしい色に見えますが、鳥たちは、私たちに見えるようには、見えていません」
「人には、色がありません」
「皮膚もシマウマのようではありません」
「強くなったから存在を気にしなくなったからです」
「そしたら、カラーはジャマになります」
「ライオンだって１色です」
「地球で人間に勝てる生き物はいません」
「これからも、人間の身体から色はなくなっていきます」
「だから、原宿の舌を噛みそうな名前の娘が出てきます」
「ニューヨークの歌姫はカタチが奇異ですが、これは次にします」
「原宿の舌を噛みそうな名前の娘は世界で憧れをもって迎えられます」
「以上です」
「ワインも出さずにすみません」
「10分経ちました」
向井坂治は、スライドを移していたメモリースティックを外して、沢田民江に手渡した。
「どうぞ帰ってもう１度見てください」
「デザインは色とカタチです」
沢田民江は、どうして逃げ帰るかを考えていた。10分経ったら逃げる予定だった。
しかし、10分経ったら、追い返されていた。
「それではまた今度」
沢田民江は、駅のテイクアウトのすし屋さんで、太巻きを１本買った。
「沢田さん大丈夫ですか？」
20時になって今春佐代子からメールが来た。
「おいしいお茶煎れて太巻き食べてる」
「平気そう」
「わかりました」
沢田民江は、向井坂治の話しはしないでおこうと思った。余計なことまで話

さないといけない気がした。
シャワーをして、さっきの10分のＰＣスライドを見た。
こんな美しいスライドをみたことがないのではないかと思える。
なぜ自分が、紫陽花の写真に心が躍ったのかわかりやすい。
紫陽花は、自分の存在を表現しないと生きられない。しかし、人間は、地球の捕食者だから、存在を表現しなくてもよくなっている。
紫陽花が素晴らしいのは当然なのだろう。
桜だって同じである。
沢田民江は、なるほどと思わざるを得ない。
向井坂治に感心してしまうのだ。
沢田民江は、少しは自信が出てきた。自分が紫陽花の写真を見た時に感じた感覚は、それでいいことなのだ。桜もそうだった。
しかし、自分がそれを創り出せない。
「このデザインってどうかな～」
沢田民江は、こんなことを今春佐代子に言ったことがない。ハナから、自分にはできないと思いこんでいる。
「このデザイン素敵じゃない」
これからもずっと、こう言い続けるのだろうと思った。
４月12日だった。
土曜日だった。
「お待たせしました」
「今日も呼んでいただいてうれしいです」
「ワインでいいですか？」
「ええ」
「今日は鳥にしますか？」
「ええ」
「昨日のデザインのカラー版ですけど、何度も見ました」
「感心しました」
「カタチ版があるんじゃないかと思いまして」
「あります」
「10分で聞かせていただけるのでしたら」

「承知しました」
ワインが来て、向井坂治は電話のために席を外した。急に沢田民江から呼び出されて、ゴメンナサイをしないといけない人もいるのだろう。
「向井坂さんが最初にこれがデザインだと思ったのはいつでどういう時だったのですか？」
「難しい質問です」
「私はショコラティエではありません」
「私はインダストリアルデザインを勉強しました」
「工業デザインです」
「たとえば～このスマホのデザインとかです」
「グッドデザイン賞を2回もらっていますが、グッドデザイン賞の多くは、インダストリアルデザイナーがいただいています」
「どんなデザインでいただいたのですか？」
向井坂治は、スマホの中から2枚の写真を見せた。2つのグッドデザイン賞の商品だった。
「腰痛ベルトですか？」
「自分が少し腰痛があるもんですから」
「今もしています」
「これ自転車ですか？」
「ええ」
「カッコいいです」
「軽いんです」
「これ欲しいな～」
「今日乗って帰ってください」
「あるのですか？」
「女性用なので私は乗りません」
「飾ってあるのですか？」
「グッドデザイン賞をもらった自転車ですから」
「そんなの乗って帰れません」
「とにかく見てください」
沢田民江はワインの数を数えていた。

大丈夫だった。３杯だった。
「じゃ～10分でデザインのカタチの話しをします」
「人には、カタチについての劣等感があります」
「理由は、２足歩行にあります」
「これは豹の歩く様子です」
「悠然としていてカッコいいです」
「これは、人の２足歩行が崩れていく様です」
「ヨボヨボです」
「豹は死ぬまでカッコいいです」
「ガンマンもみんな真似しますが、しょせんは２足歩行ですからヨボヨボになります」
「劣等感を裏返すと、この自転車のようになります」
「カッコよさを求めるのですか？」
「そうです」
向井坂治は、隣の部屋からグッドデザイン賞の自転車を持ってきた。片手で持てるのではないかと思えるくらいに軽々と持ってきた。
「機能がダメだったらデザインは成り立たないのですが、この自転車は、故障をしません」
「どうですか？」
「今日借りて帰ります」
「明日お返しします」
「どうぞご自由に」
沢田民江は、土曜日で少しラフな服装をしていた。多分、40分くらいかかりそうである。
「すみません～お借りします」
４月13日だった。日曜である。
沢田民江は、　　　ハワイで買った野球帽をかぶって白のパンツに白のダウンジャケットにした。
昨日は40分かかったが、今日は下りである。30分で行けると思った。三軒茶屋である。
沢田民江は、こんなスピードでは危ないと思いながら、自転車が勝手に走っ

てしまう心地よさに任せていた。この自転車は素晴らしい。欲しいのだが、高そうだ。この自転車はグッドデザイン賞の記念だからいただけない。
「いらっしゃい」
「自転車のままエレベーターでお願いします」
沢田民江は、この事務所は３回目である。しかも毎日来ている。
向井坂治の仕事のジャマになっているのではないかと心配してしまう。
「カッコいいですね～別人のようです」
「汗ですか？」
「今日は暑いから」
「シャワーありますからご自由に」
「ありがとうございます」
「着替えがないのでガマンします」
「ご自由に」
「コーヒー煎れています」
「自転車乗って帰ってください」
「記念の自転車だからできません」
「どうぞ」
「ありがとうございます」
「ナポリタンをつくるところでした」
「一緒にいかがですか？」
「10分だけと思っていましたのですが」
「ご馳走してください」
「承知しました」
「ここで食事してるんですか？」
「朝とお昼だけです」
「夜はどこかで食べます」
「わたしはどこかで買って帰ります」
沢田民江は、急に寒くなった。眠くなってきた。
「あの～シャワーお借りしてもいいですか？」
「どうぞ～わかりやすいシャワーです」
「ありがとうございます」

沢田民江は、シャワーで温かくなってホットした。汗をかいてそのままだったからだ。身体が冷たくなってしまった。
「バスタオル置いておきます」
「ありがとうございます」
「フェイスタオルは中にあります」
「ありがとうございます」
沢田民江は、急に快調になった。
下着が心配である。汗で湿っているかもしれない。また身体が冷たくなるかもしれない。
そっと手を伸ばしてバスタオルを探った時、下着とメモがあった。
「まだ使っていません」
「オトコ物だけど」
「バスローブも使っていません」
沢田民江は、脱いだ下着を触ってみた。とても身には着けられない。
「下着もお借りします」
「どうぞ」
髪は洗っていないのだが、自分の部屋の風呂上りと同じだと思った。
「ナポリタンをどうぞ」
「いただきます」
「ワインしました」
沢田民江は、返事をしなかった。お昼にワインなんか飲んだことがない。
身体が冷たかった。シャワーで温かくなったのだが、どういうわけだか冷たい。
「おいしいです」
「自信があります」
「なんでもできるのですか？」
「イタリアンだけです」
「グラタンもですか？」
「ええ」
「ナポリタンおいしいです」
「ありがとう」

沢田民江は、身体が温かくなって眠くなった。
「沢田さん大丈夫ですか？」
「気持ちいいからこのままでお願いします」
「もしよかったらベッドにどうぞ」
沢田民江は、そのまま這ってベッドに向かった。多分、そのまま眠ってしまった。
「大丈夫ですか？」
遠くで向井坂治の声がした。
「大丈夫ですか？」
沢田民江は跳び起きて服を探した。
シャワー室から下着を持ってきた。
バックの中に押しこんだ。
スマホもあった。財布もあった。
「自転車で帰った方がいいです」
沢田民江は、振り返らずに自転車のままエレベーターに乗った。
沢田民江は、すぐに引き返して向井坂治の事務所をピンポンした。
驚いた向井坂治を横目に、沢田民江は、着ているものを脱ぎ棄てながらベッドに向かった。
「お願いします」
「そのままでいいです」
沢田民江は、学生時代以来のことだった。
心配したのだが、身体は覚えていた。燃え尽きてしまった。
向井坂治がシャワーをしている時に、沢田民江は、そのまま起きて脱ぎ棄てたものを着て帽子をかぶって、今度は振り返らずに30分でマンションに帰った。
沢田民江は、お風呂にゆっくり浸かった。なんとなく笑みがこぼれる。
４月14日だった。
「沢田さんいいことありました？」
「なんで？」
「雰囲気です」
「いいことなんかない」

「わたし工場に行ってきます」

「なに？」

「お誕生日ショコラ－３葉桜を生産してるから」

「そうね」

「沢田さんはどうします？」

「ここにいる」

「じゃ～電話します」

「わかった」

沢田民江は、昨日のことで疲れているわけではないのだが、何もしたくなかった。

向井坂治の別の顔

●驚きの部屋

４月20日だった。
「お誕生日ショコラ１２００－３葉桜を出荷しました」
梶功からメールが来た。
「お誕生日ショコラ１２００紫陽花を試作しています」
「できましたらメールしますから集まってください」
赤根百合からメールがきた。
日曜だったが、沢田民江は渋谷に向かった。お店のオープンする10時には、店頭に並んでいるはずである。
「やっと入りました」
「お誕生日ショコラ待ってる人がいます」
「まだ陳列したばかりなのに３つ売れました」
「待ってる人がいるんです」
沢田民江は、向井坂治にお礼言わないといけないと思った。
「もしもし」
「どうしました？」
「渋谷なので行きます」
「わかりました」
これからどうなるのかわかっているのに、簡単な会話で通じてしまうことに違和感も何もなくなっていた。躊躇しない自分が不思議だった。
今春佐代子からは連絡がない。多分カレのマンションだ。
「今日お誕生日ショコラー３葉桜が店頭に並びました」
「待っている人がいてすぐに売れはじめています」
沢田民江は、そう言いながら、脱ぎはじめていた。
「感謝してます」
「どうもありがとう」
そのまま脱ぎ棄ててベッドに入った。

この１週間、なにかを欲しがっていたことがはっきりした。これから、ずっとこうなる気がした。
沢田民江は、よくわからなくなっていた。気を失ったのかもしれない。
少しづつ様子がわかってきた。シャワーの音がする。
沢田民江は、起き上がって、裸のままシャワーに向かった。右手の部屋の電気がついていて、ドアが少し開いていた。自転車を置いてあった部屋だ。
覗き視をするわけではないが、部屋に入ってみた。
インダストリアルデザイナーらしく、自動車のデザイン雑誌や自転車の雑誌があってポスターが貼ってあった。時計もやっているのかもしれない。
床に、ベルギーやスイスのチョコのお店のカタログが積んであった。付箋が貼ってあった。
５月の旅ショコラそのままが、ドイツ語で出てきた。ドイツのショコラの会社のカタログである。アイガーである。
こんままだと、お誕生日ショコラもあるのではないかと思った。
１番下のカタログの付箋を開けてみた。ウイーンのショコラティエのカタログだった。ブリュッセルとパリとリオンのショコラティエのカタログがたくさんあるのだが、そのどれにも付箋が貼っていなかった。
２０１４バレンタインショコラ２５００そのままだった。次のページに、お誕生日ショコラがあった。
沢田民江は、まずいものを見たと思った。
「裸で帰ったのかと思いました」
沢田民江は、一瞬にして凍った。
少し前まで、あれだけ燃えていたのに、凍ってしまった。
「シャワーしてきます」
「お昼ナポリタンでいいですか？」
「ありがとうございます」
沢田民江は、どういうわけだか、向井坂治に気づかれてはいけないと思った。
あの付箋のことを気づかれてはいけない。
「なんかいいことありました？」
「ワルイことかもしれない」

ここのとこ日曜日は２回とも、向井坂治のベッドで過している。身体が少し変化しているのかもしれないとは思う。今春佐代子には読まれてはいないのだが、疑われている。
「ワルイことがあったのですか？」
「今日はなんだっけ」
「これから大阪に行きます」
「なんで？」
「大阪のお店で大阪のショコラティエの話を聞いて欲しいそうなので」
「売り込み？」
「わかりません」
「すぐ行くの？」
「ええ」
「わたしお誕生日ショコラ１２００－４紫陽花の試作食べる日だから」
「わたしは明日７月の旅ショコラ１２００ニースの試作を食べます」
「わかった」
沢田民江は、上手く話をズラしたと思った。
いままで、今春佐代子には、何でも話してきた。今春佐代子も、カレの話などを含めて、なんでも沢田民江に話をしてきた。
向井坂治のことは、今春佐代子には話せない。今春佐代子に話せないようなことをしたことが不安になる。
多分、次の日曜日も、身体は、渋谷に向かうだろうと思った。
「紫陽花らしい味がします？」
「紫陽花の味ってなんだっけ」
「オレにはよくわらないけどおいしいことは確か」
「黄色い紫陽花どうします？」
「あった方がいいと思う」
「薄紫と薄いピンクと濃いブルーと真っ赤な紫陽花と黄色い紫陽花」
「赤根さんの紫陽花のデザインが最高にいいと思う」
「すごく売れる気がする」
「12万個を増やすんですか？」
「ううん～品切れて待つのもいいかと思う」

沢田民江は、自分自身も、次第に、ショコラティエのマーケターとして、成長してきていると感じている。自信も少しは出てきた。

●パクリじゃないのか

「もしもし」
「佐代子どうしたの？」
「今日どうしてます？」
「なにが？」
「早く帰ります？」
「お風呂に浸かりたい」
「大阪から帰りに寄りますから」
「わたしのマンション？」
「ええ」
「ごはんつくっておくわ」
「お願いします」
「わかった」
帰り路のスーパーで、刺身を買った。ウーロン茶と北海道の麦焼酎を買った。
最近は、ワインは、向井坂治の部屋で飲むくらいのものだ。
ずっと、ホットウーロンハイである。
ジャガイモサラダを大量に作っていた。卵が危ない。
「シャワーしてもいいわよ？」
「大事な話しがあるからお酒の前にしたい」
「サラダできたから～待って」
「怖いな～大事な話し」
「怖い話しです」
「どうぞ」
今春佐代子は、カラーコピーを机に並べた。向井坂治の隠し部屋のようなところの、床に積んであったヨーロッパのショコラティエのカタログの付箋のあった写真と同じである。

わたしの５月の旅ショコラはこれだった。アイガー。
「２０１４バレンタインショコラ２５００はこれだった」
「お誕生日ショコラはこれでした」
「どうしたの？」
「大阪のショコラティエがヨーロッパから帰ってきた」
「旅行？」
「修行」
「池尻製菓のお店を見てビックリしたそうなの」
「ヨーロッパでは有名じゃないショコラのお店のカタログだから、気がつかない人が多いかもしれないって言ってた」
「わたしすごいピンチ」
「対応しなかったらネットに情報を流す」
「脅かされたのか」
「ワルイのはこっちなんだけど」
「３日余裕をくれた」
「４月25日中に対応すること？」
「それ過ぎたら、ヨーロッパの会社にも連絡する」
「わたしクビになっちゃう」
「沢田さんもクビかもしれない」
「２０１４バレンタインショコラ２５００は終わってるけどお誕生日ショコラがはじまってる」
「お誕生日ショコラは向井坂さんから沢田さんがプレゼントされてることになってるでしょ？」
「うん」
「沢田さんがヨーロッパのショコラティエをパクってることになるんです」
「でも桜と葉桜と紫陽花はヨーロッパにないから」
「最初のお誕生日ショコラの真っ赤なハートがこれだから」
沢田民江は、桜も葉桜も紫陽花も、日本の写真集のどこかにあるのだろうと確信をした。
これは、向井坂治の習性なのだと思った。
沢田民江と今春佐代子は、静かになって、ホットウーロンハイを飲んだ。そ

して刺身を摘まんだ。
どうしてこんなことになってしまうまで気がつかなかったのか、理解できないのだ。
このまま25日が過ぎれば、少しはブランドのある池尻製菓は、地に墜ちてしまう。
沢田民江は、なみだがながれているのを知っていた。すごく残念なんのだ。
向井坂治を守りたい気持ちが少しはある自分が残念なのだ。

先里潤

●パクれればラッキー

「このホットウーロンハイを教わった人いるでしょ？」

「先里潤」

「メールできます？」

「どうしたらいいか聞いたらおかしい？」

「おかしい」

「わたしのパソコンに連絡先送ってください」

「なにするの」

「わたしどうしたらいいかわかんない」

「佐代子～わたしシャワーしてくるわ」

「時間ないけど何したらいいかわかんないからシャワーしてくる」

沢田民江は、とめどなく涙が溢れることを知っていた。シャワーをしたいわけではなかった。なみだを流したかった。

「はじめて連絡を差し上げます」

「先里潤さまが、ホットウーロンハイを教えた沢田民江の後輩の同僚で、今春佐代子と申します」

「わたしと沢田民江は、とんでもないことに巻き込まれてしまいました」

「25日中に対応をしないと、池尻製菓という勤めている会社に及ぶこともあって、わたしも、沢田民江も、会社をクビになると思っています」

「どうしていいかわかりません」

「相談にのっていただけませんか」

今春佐代子は、太巻きを買っていた。切ってきた。

たったこの時間に返事が来た。

「現在７時20分だけど鳥鍋居酒屋に10分で行けます」

「電話をメールします」

「２人でこれますか？」

「包み隠さず話してください」

今春佐代子は、バスタオルを沢田民江に投げた。
「どこにいるの？」
「わかんない」
「あの～先里潤さんを探しているのですが」
「奥の４人部屋です」
「この居酒屋は、奥に個室があった」
「失礼します」
「どうぞ」
「メールしました今春佐代子です」
「先里潤です」
パソコンを見ていた。多分、先里潤は、ここにいたのだ。
「晩ごはんを食べるんだけどどうですか？」
「鳥鍋です」
「いらっしゃいませ」
「鳥鍋を３人前にしました」
「どうぞ」
「ホットウーロンハイはご自分でどうぞ」
「ホウレン草どうぞ」
女将さんらしき人が、大きなボウルのような器にいっぱいのホウレン草のおひたしと袋のままのかつぶしと取り皿と箸を置いて行った。
「ホットウーロンハイ飲むんだったら自分でどうぞ」
顔を見合わせている２人を見て、先里潤が言った。
「やります」
今春佐代子がコップを探した。
「どうぞ～私は飲んでますから」
先里潤は、右の戸棚からコップを２つ出した。
「ありがとうございます」
「ホウレン草を食べましょう」
沢田民江は、取り皿にホウレン草を入れた。
ものすごい量である。食べきれるのだろうか。
「かつぶしをかけますか？」

「お願いします」

「すぐに鳥ができますから」

「ここは話しが漏れませんから安心してください」

「どうぞメールの続きを話してください」

「じゃ～カンパイしましょう」

「あなた達の悩みの解決にカンパイです」

「あなた達の失敗は何ですか？」

「これはヨーロッパのショコラティエのカタログのコピーです」

「これは池尻製菓の５月の旅ショコラのパンフレットです」

「どっちが真似したんですか？」

「池尻製菓です」

「あなた達がパクったんですか？」

また２人は顔を見合わせた。

「知らなかったんだ」

「わたしが、今日大阪のショコラティエに言われたんです」

「ネットでバラす」

「ヨーロッパの会社に連絡する」

「25日中に対応したら黙っておく」

「時間がありませんね」

「パクったのは誰ですか？」

また２人は顔を見合わせた。

「包み隠さずと言ったはずです」

「向井坂治というインダストリアルデザイナーです」

「会社の常務が連れてきました」

「ショコラティエじゃないけどグッドデザイン賞を２度ももらってるからって」

「とんでもないオトコだったんだ」

「このそっくり使ってしまう手法からして、彼は、遠くのものをそのままパクルんでしょうね」

「２度のグッドデザイン賞も、同じだと思います」

「誰も探せないだけです」

「デザインはこれがあるから難しいんです」
「この雑誌は、私がグッドデザイン賞の大賞をいただいた時のいきさつを書いたものです」
「グッドデザインを主催している雑誌です」
見開き10ページに、カレー写真と、研究開発中の写真と記事が掲載されていた。
「ここまでになると、誰が見てもパクリとは思いません」
沢田民江と今春佐代子は、60にはなっていそうな先里潤を、じっと見てしまった。
「こんなものを示されないからわからないでしょうね」
「先里さんはデザイナーですか？」
「デザイナーでもあるけど研究者でもあるし、いろいろです」
「２０１４年は危険な時代です」
「日本では、パフォーマンス技術が向上しました」
「苦労してオリジナルを追うよりも少しパクってパフォーマンスを追ってもわからない時代なんです」
「わかりません」
「商品も会社も人も、氷山のように存在することが大事です」
「氷山は目に見えない水面下が大きくないとひっくり返ります」
「あなたたちだって、氷山の上ばかりしか見ません」
「評価とか成果は氷山の上で測られますから」
「氷山の上は消耗します」
「いつか消えてなくなります」
「氷山の下に何もなかったら、存在そのものが消えます」
「私は商品に興味がありますが、会社も人も、氷山の下次第で、立派であるかどうかが決まります」
「しかし、パフォーマンス技術の向上で、氷山の下が、あたかも凄いかのように、氷山の上を表現することができるようになっています」
「最近多くなっている研究論文についても同じようなことが頻繁にあります」
「他者の氷山の下をコピーすればグッドだという考えの人も多くなっていま

す」
「ラッキーという考えです」
「パクれればラッキーという考えです」
「今回のことについては、最近多くある、パクれればラッキーという考えの中の一端です」
「向井坂治というデザイナーが、パクれればラッキーという考えなのです」
「鳥鍋できました」
沢田民江と今春佐代子は、先里潤の難しい話しを必死になって聞いていた。こんなことは頻繁にあることなんだと言っている気がする。それが落とし穴だと言っている。
落とし穴に墜ちたのは、沢田民江と今春佐代子と池尻製菓である。穴に墜としたのは、向井坂治である。
今春佐代子が、器に鳥鍋をよそった。
「ホロホロ鳥です」
「おいしいです」
看板にもメニューのどこにも、ホロホロ鳥とは書いてない。
「ちょっと別の用事があります」
「１時間くらい食べて待っていてください」
「いいですか？」
沢田民江と今春佐代子は返事をしなかったが、まだ20時になっていない。
「私のパッドを貸します」
「先里潤の名前でいろんな本を書いていますので、読めます」
「ダウンロードしてあります」
沢田民江と今春佐代子は、何も話すことがなくなった。
沢田民江は、向井坂治と同じベッドにいたことが、なみだになる。思い出すと、悔しくなる。
「佐代子話しがある」
「なんですか？」
「わたし～昨日の日曜日も先週の日曜日も、向井坂さんの事務所にいた」
「寝たんですか？」
「うん」

「２回ですか？」
「その写真を向井坂さんの隠し部屋で見た」
「気がついていたんですか？」
「わたしもキスされてほとんどベッドインだったから沢田さんのことは言えないんだけど」
「今さ～すごいラクになった」
「佐代子に話してラクになった」
「先里潤さんに話さないといけないのかな～」
「わかんないです」
「このオンナバカだって思われる」
「ええ」
「これが公表されたら～池尻製菓って～売上止まるかもしれませんね」
「佐代子～脅かさないで」
「株だって１０００円くらい下がるかも」
「あんた一緒に死んじゃう？」
「沢田さんだったらいいけど～カレがいるからな～」
「カレだって嫌気さして逃げるわよ」
「こんなオンナだとは思わなかった？」
「パクリだけで仕事してるんだもんな～」
「でも～パクったのだけがヒットするのって～なんでしょうね」
「ダメね～」
「鳥食べてないじゃない～お代り置いておくからしっかり食べて」
女将さんらしい人がホロホロ鳥のお代りのボウルを持ってきた。
「あの～先里潤さんって何ですか？」
「もうすぐわかりますよ」
「どういうことですか？」
「わたしは上手く説明できない」
沢田民江も今春佐代子も、女将さんが何を言っているのかわからない。
「焼酎ありますか？」
「あります」
「お湯は？」

「ウーロン茶がありません」
「わかりました」
少し経って、若い女性がウーロン茶をボトルで持ってきた。
「どうする？」
「わかりません」
「死ぬかもしれないからいいか」
「死ぬんだったら25日にしましょう？」
「ギリギリの日ね」
「向井坂さん~愛したんですか？」
「わかんない」
「騙されたんですか？」
「脱いだのはわたしだから」
「先里さんの話しでは~向井坂治は悪人でしょ？」
「そうだけど~向井坂さんは~自分の能力だって思ってるんじゃないかな~」
「スキルですか？」
「パクリとは言わないけど」
「ベッドも上手なんですか？」
「わたし意識なくなった」
「研究したんだろうな~」
「こっちもパクリがあるんでしょうね」
「気持ちワルイ」
「どうします？」
「死んじゃえばいいか」
「そうですね」
「甘根さん~向井坂さん自分が連れて来たのにわたしたち怒るよね」
「確実です」
「沢田さんが向井坂治と寝たの知ったら絶好ですよね」
「絶好って？」
「２人で結託して」
「３人じゃないの？」

「わたしは２人に巻き込まれた」
「わたしが悪人なの？」
「だってそういうシナリオにピッタリです」
「クビね」
「首だけだったらいいけど～世間に晒されるかもしれません」
「晒しクビ？」
「ええ」
「こんな娘じゃなかったってお母さんインタビューで言うな～」
「しばらくニュースになります」
「池尻製菓だもんな～」

●向井坂治のよろい
「先里さん遅くなるそうです」
「今日は、このまま帰って明日は何事もなく会社に出るように言ってくれです」
「細かいことはパッドにメールしたので、自分のパソコンにメールしてくれとのことです」
「明日も今日と同じ時間にこの部屋に来るように言っていました」
「鳥鍋を全部食べて帰ってくれです」
「どうにでもなれの心境でいてくれです」
沢田民江と今春佐代子は、まだ21時になっていないのだが、鳥鍋をゼンブ食べて、自分のパソコンにメールした。
「どうします？」
「先里さんの言うとおりにするしかないけど」
「わたし帰ってこれ読んでいいですか？」
「こんなながいメールくれるんだったら帰ってくればいいのに」
「帰れなくなってるんですよね」
「死ぬんだったら一緒だからね？」
「25日ですよ？」
「わかってる」

「あんたいくら持ってる？」
「お金ですか？」
「すみません～お会計をお願いします」
女将さんがやってきた。
「パッドお返しします」
「お会計は済んでいます」
沢田民江と今春佐代子は顔を見合わせた。
「明日も19時20分にはここにおいでください」
沢田民江と今春佐代子は、おじぎをしてお店から出るしかなかった。
よく意味がわからない。
だいたい、先里潤は、沢田民江と今春佐代子の窮地をなんとかしてくれるのだろうか。ただ話しを聞くだけなのだろうか。
さっぱりわからない。
今春佐代子は、シャワーをして、ながい先里潤のメールを読みはじめた。
カレが来ないかとメールしてきているのだが、エッチする気になれない。
ほっている。
「こころは、愛とよろいでシエアーされています」
「フツウの大人は、よろいが80に愛が20です」
「よろいとは、生身の外側に何枚も着けているよろいです」
「どこどこ大学だとかもありますしグッドデザイン賞いただけるのはいいのですが、いただくと、それそのものがよろいになります」
「履歴書だって、よろいの種類を書くようになっているのですから、社会がよろいの社会であることがわかります」
「ちなみにブッダのこころは、よろいが20に愛が80です」
「そんな人は東京では暮らせません」
「あなたたちを奈落に突き落としている向井坂治さんは、なにかワルイことをしましたか？と言っています」
「たとえコピーでもいいものはいいという姿勢です」
「２０１４年には、残念なことに、このような人が多くなっています」
「音楽の世界も研究の世界もその他の多くの世界も」
「パクリがフツウの時代なのです」

「ところが、池尻製菓のことを考えてください」
「池尻製菓は氷山の下が大事です」
「向井坂治は氷山の上が大事です」
「あなたたちは、このままでは、氷山の上のパクリの仲間です」
「わたしの書籍がパッドに入っていましたが『よろいってなんだ』を読んでください」
「よろいの人生をおくってはいけません」
「愛の人生をおくってください」
「もし25日に覚悟ができているのだったら戦ってください」
今春佐代子はさっぱりわからない。
さっきのパッドから『よろいってなんだ』が送られてきた。
「もしもし」
「沢田さんが送ってもらったのですか？」
「忘れて帰ってきた」
「読んだら電話するから」
「わかりました」
沢田民江は、必死に『よろいってなんだ』を読んだ。追い詰められているのに、これでいいかもわからない。本など読んでいる場合なのだろうか。
「人は身体の外側に貼られたよろいを大事にします」
「よろいを見ることでその人を判断しようとします」
ホントは違うでしょ？と言っているのだろうが、沢田民江だって、向井坂治の２度のグッドデザイン賞の賞状を見ると、ホレボレしてしまう。
みんなよろいだと言っている。よろいが厚い人はダメだと言っている。
向井坂治の隠し部屋の床に積んであったヨーロッパのショコラティエのカタログの付箋を見た時、いけないことをしている、パクリをやっていると、一瞬に理解した。
ただ、上手く説明ができないのだ。
なにがいけないことなのか説明できない。
しかし、説明はできないが、世間に公表されたら、池尻製菓は破滅する。このこともよくわかっている。
自分自身もパクリ屋さんなのだろうか。

向井坂治のひょっとするとパクリの人生が、よろいによるものだと、先里潤は言いたいのだと思う。
１時頃だった。
先里潤から、『愛ってなんだ』が送られてきた。今春佐代子にも送ってある。
よくわからないまま、開いて読みはじめた。
よろいすらよく理解していない。先里潤が何をしたいのかよくわからない。
もう４月22日なっている。
「佐代子おはよう～」
「眠ったんですか？」
「ううん」
「読んでたんですか？」
「シャワーしてきた」
「愛ってわかりました？」
「小さい声で話して」
「人が動く押しボタンですよね」
「沢田さんは向井坂治を愛したんですよね」
「違う」
「だって脱いだんでしょ？」
「小さき声で話して」
「わたしは向井坂治のよろいを愛したの」
「わたしの勘違い」
「わたしの中で愛とよろいが分けられていなかった」
「グッドデザイン賞も向井坂治と思ってしまったの」
「生身の向井坂治は愛が20以上あるかどうか」
「あの人～愛とか似合わないです」
「どうしてわたしたちって気がつかなかったんだろう」
「愛とよろいが分けられていなかったからじゃないですか？」
「こんなんでオンナってコロってなっちゃうよな」
「わたし危なかった」
「わたしは地に墜ちたわよ」

「小さい声で話してください」
「オレは沢田民江を抱いたとかツイートされたら終りね」
「小さい声で話してください」
「やりかねないよね？よろいの人生の人だから」
「わたしたちってバカだね～」
「わたし～７月の旅ショコラの試作食べてきますから」
「え～大丈夫？」
「今日はフツウどおりやれって先里さんが言ってたから」
「わかった」
沢田民江と今春佐代子は、終日、フツウの日のように仕事をした。25日中になんらかのことをしなければ、世間に公表されるのだ。そのことを考えると、焦ってしまうのだが、どうしたらいいのかわからない。
15時くらいからは、２人とも、ほとんど何もしゃべらなくなった。
「ちょっとお聞きしたいんですけど」
「どうぞ」
「先里さんは、わたし達になにをしているのですか？」
「わたしたちは、ひょっとしたら遠いところへ行くかもしれません」
「助けてくれってお願いしたんです」
「お願いされる理由はないっておっしゃるんだったら、それでもいいんです」
「承知しています」
「承知してるってどういうことですか？」
沢田民江は、７時20分に同じ居酒屋の同じ部屋で待っていた先里潤を見るなり、荒々しく突っ込んだ。
「25日に行う対応のことが大事です」
「あなた達は、何が問題で、何をすればいいのか理解していません」
「だから先里さんにお願いしたんです」
「昨日と今日中に、この問題を、あなた達で説明できるようにしたいのです」
「そうしないと、また同じことが起きます」
「わたしたちが死んじゃったら同じことは起きません」

「たかだかこの程度のことで」
「わたし怒ります」
「いらっしゃいませ～またホロホロ鳥です」
「４人前ありますからたくさん食べてください」
「ホウレン草は気持ちが落ち着きます」
女将さんが、大きなボウルいっぱいのホウレン草のおしたしとかつぶしを持ってきた。若い女性が鳥鍋とボウルいっぱいの具を持ってきた。
「どうぞごゆっくり」
「ありがとうございます」
今春佐代子は、黙っていた。ホウレン草を取り分けていた。
「自分で戦えとおっしゃるのですか？」
「ええ」
「よろいはアクを呼びます」
「今回の関係者をよろいの厚い順に並べてください」
今春佐代子は、箸が止まった。
「向井坂治」
「次は誰ですか？」
「わかりません」
女将さんが、ウーロン茶とポットと北海道焼酎を持ってきた。
沢田民江は、考えながら、ホットウーロンハイをつくりはじめた。
「次はあなたたちの常務さんです」
「甘根和人ですか？」
「ええ」
「カンパイしましょう」
沢田民江と今春佐代子は、こんな状況でカンパイと言っている先里潤の気がしれない。

●パクリと戦う

「甘根さんのよろいってなんですか？」
「向井坂治のよろいに全く気がつかないからです」

「わたしたちも気がつきませんでした」
「彼は向井坂治を紹介したんです」
「権力者が紹介するんですから」
「３番目は誰だと思いますか？」
「わかりません」
「あなたたちです」
「ヒーローのように向井坂治を見ました」
「多分、これまでも同じようなことがあったはずです」
「ありません」
沢田民江は、吠えるように言った。
「向井坂治のパクリに全く気がつかないということは、あなたたちのよろいが厚いからです」
「自分もそうなりたい」
「パクリはしたくありません」
「成功者になりたい」
「向井坂治を成功者だと思ってしまいました」
「まず自分のよろいを脱がないと真実がわかりません」
「５月の旅ショコラは今春さんですか？」
「そうです」
「甘根さんが向井坂治に仕事を頼めと言ったんです」
「もともとは~２０１４バレンタインショコラ２５００を甘根さんが自分で頼んでいたんです」
「沢田さんは関係ないのですか？」
「２０１４バレンタインショコラ２５００が10万個くらい残るから売り切りを考えろって言われたんです」
「それで向井坂さんに売り切り案を頼んだんです」
「それはパクリの２つ目のお誕生日ショコラです」
「わたしは、向井坂治の隠し部屋でこのカタログを見ました」
「いつですか？」
「20日です」
「以前からの仲ですか？」

「14日20日にベッドを共にしただけです」
「どうして今春さんに話さなかったのですか？」
「わかりません」
「沢田さんは、向井坂さんを守ろうとしたんだろうけど、よろいはよろいを守ろうとします」
「あなたのキレイさはよろいになります」
沢田民江の目から、いきなり大粒のなみだが溢れてきた。
「ひょっとすると、お誕生日ショコラは、向井坂治からプレゼントされたんじゃないですか？」
「どうして断らなかったんですか？」
沢田民江は、居場所がなくなった。25日には、確実に死ぬだろうと思った。プライドがズタズタになった。
「わたしは向井坂治のよろいを愛したんです」
「勘違いです」
「もし生き続けたら失敗はしません」
「どうしてですか？」
「愛とよろいを分けて考えられるから」
「しかし、お誕生日ショコラを向井坂治からプレゼントされてラッキーと思ったのでしょうから、沢田さんのよろいも相当なものです」
「３つ目のパクリなんだけど～アイガー」
「甘根さんが向井坂さんを使うように指示されたからです」
「あの５月の旅ショコラのアイガーにこころを奪われたわたしがバカなんです」
先里潤は、透明ケースから写真を取り出した。
沢田民江も今春佐代子も、アッと声を発した。
お誕生日ショコラ桜の写真だった。お誕生日ショコラ葉桜の写真だった。お誕生日ショコラ紫陽花の写真だった。
「向井坂治のオリジナルは何１つありません」
「彼は探して来るチカラが凄いと誇っているのです」
「鳥鍋を食べましょう」
慌てて今春佐代子が器に鳥鍋をよそりはじめた。

「どうやら今回の問題が明らかになったようです」
「いただきます」
「いただきます」
しばらく鳥鍋を食べていた。
「明日にしようと思ったんだけど」
「まだ20時です」
「向井坂治に電話してください」
「沢田さんが行くと言ったら拒否はしないでしょうから」
「対決できますか？」
「なにをするんですか？」
「２人で考えてください」
「25日まで時間がないんです」
「ゼンブ認めてゴメンナサイをしてくれですか？」
「あなた達２人は共犯です」
「え？」
「被害者は池尻製菓なのです」
「あなたたち２人にゴメンナサイしてもらったって何も解決しません」
沢田民江と今春佐代子は、共犯だと言われて胸が高鳴った。
「あなた達は共犯者だから、自首すれば、少しは、世間の白い目に晒される度合いを少なくできるかもしれません」
沢田民江と今春佐代子は、やっと理解できた。先里潤がやりたかったことだ。
沢田民江も今春佐代子も先里潤も、少しはホットウーロンハイを飲んでいる。タクシーにした。
「もう時間がないから本音で話さないと間に合いません」
「私は外にいますから危なくなったら電話してください」
「ケータイをそのままにしておいてください」
「わかりました」
向井坂治は、ナポリタンをつくっていた。今春佐代子を見て驚いた。
「どうしました？」
「月曜日に大阪のショコラティエに言われました」

「これです」
「何らかのことをしないとネットで公表するです」
「これがどうしたのですか？」
「みんな向井坂さんがパクったものです」
「失礼な」
「じゃ～５月の旅ショコラはなんなんですか？」
「あなたたちは、私が示したものを、そのまま使ってしまっただけです」
「私は、参考に渡したのです」
「桜や葉桜もですか？」
「ショコラティエはオリジナルにしましたが、ポスターなどはこの写真のまま使ってしまいました」
「クレームはないでしょうが、あなたたちがおかしいんです」
沢田民江も今春佐代子も、ことばを失ってしまった。どうしていいかわからないのだ。共犯どころではない。主犯が参考のために渡しただけだと言い張るのだ。
これでは、犯人は、沢田民江と今春佐代子になってしまう。
「どうぞ～ナポリタンをつくっています」
大粒の涙が溢れる２人に、ナポリタンを勧めた。
先里潤は、今春佐代子にメールをした。
「すぐに外に出てください」
帰りのタクシーで、沢田民江と今春佐代子は、ずっと泣いていた。
「わたしもうカレのこと考えられない」
「やっぱ25日にしよう？」
「死ぬのは25日の夜中にしてください」
「まだ戦ってるんだから」
「下駄を履くまで勝負はわかりません」
「帰って残っている鳥鍋を食べて帰りましょう」
「これからどうなるんですか？」
「明日はまだ24日です」
４月24日のお昼だった。
「時間切れね」

「覚悟はできてますか？」
「今日このカレーでよかったわ」
いきなり、先里潤からメールが来た。
「20日の日曜のことと21日の大阪のことと、23日昨日のことを、甘根さんに話してください」
「主犯向井坂治共犯沢田民江と今春佐代子です」
「主犯を説得したのですが失敗しました」
「自首しないとタイヘンなことになるのでと話してください」
今春佐代子が甘根和人の席に向かった。
沢田民江は、ケータイを先里潤に開いたままにした。
「日曜にわかっていたのになんで今日まで黙っていたんだ」
甘根和人の大きな声がした。
甘根和人は、向井坂治に電話した。
「私は参考にしてくれなど聞いてない」
「私はグッドデザイン賞を２度もいただいているんです」
「パクリ屋ではありません」
甘根和人と向井坂治の電話はながくなった。何度も同じことを言っている。
沢田民江と今春佐代子は、もう自分にできることは何もないことを感じた。
ただ、包み隠さずすべてを話せたことだけが救いだった。
沢田民江と今春佐代子は、そのまま外に出た。
「どうする？」
「明日の夜中の方法を相談しようか」
「まだ戦ってるんだって怒られる」
「ホロホロ鳥食べよう？今日で終わりかもしれない」
沢田民江と今春佐代子は、まだ４時だったが、居酒屋に入った。
「待ってますよ？」
女将さんが言った。
「こんにちわ～」
「どうぞ」
「甘根さんはどうですか？」
「わたしが向井坂さんの事務所で見たのに黙っていたから、それをすごい

怒っているんです」
「当然ですね」
「もう失敗はしません」
「26日も生きていたらですけど」
「死ぬのはギリギリにしてください」
「まだ勝負するんですか？」
「当然でしょ？」
「必ず勝ちます」
沢田民江と今春佐代子は、必ず勝ちますと言う先里潤をじっと見ていた。
25日だった。
「ネットに公表する時間ですが、26日の０時を過ぎてからにしていただけないでしょうか」
「このメールを、大阪のショコラティエに流してください」
「返事をもらってください」
今春佐代子は、まだ８時30分なのに、大阪のショコラティエにメールした。
５分もしないうちに返事が来た。
「承知しました」
「沢田さんどうします？」
「なにもすることないよな」
「今井さんに話しておかない？」
「そうですね」
「わたしたち死んだら困るもんな」
今春佐代子は、今井春馬の席に向かった。
「ちょっとちょっと～なんなんだ？これは」
「タイヘンなことじゃないか～今日だろう？」
「そうです」
今井春馬は机を両手でバンと叩いた。
「話して良かったね」
「わたしたちクビですね」
「ますます～明日生きてられなくなった」
「今井さん～慌てて甘根さんのとこに行ったけど～どうなるんだろう」

「わたしたちって無力ね～」
「ゼンゼンチカラない」
「どうやって死んだらいいか考えるか」
「ここの屋上ですか？」
「一番簡単ね」
「すごい痛いかも」
「専門のサイトがないのかな～」
「調べます」
「ラクに死ねるのがいいから」
「わかりました」
なにもしないのにお昼になった。
「仕事しないよね」
「もういいです」
「お昼食べに行こう」
「こんなんで死ねるんですか？」
「わかんない～」
「社員食堂お刺身定食です」
「明日になったらみんな白い目で見るから今日食べておこう？」
「死んでいません」
「白い目で見られないか」
「ええ」
何事もない池尻製菓のお昼休みである。明日は大騒ぎになることがわかっている。
「静かですね」
「今井さん見えなくなったけど」
「甘根さんと相談してるんだろね」
「なんで呼び出しがかからないのかな～」
「わたしたちはもうクビで終わりでいいけど～池尻製菓困るもんな～」
「先里潤さん何してるんだろう」
「わかりません」
「信用できるのかな～」

「わかりませんけど～もう時間ですね」
15時になっても、甘根和人も今井春馬も姿を見せなかった。
「逃げたの？」
「わかりません」
「先里さんは？」
「わかりません」
沢田民江は、先里潤に電話をした。
「電話切ってる」
「いよいよですね」
そして17時になった。
「どうします？」
「わたしたち２人になったよね」
「ここの屋上からにしますか？」
「あんたカレに話したの？」
「ゼンゼンです」
「おかしなことになったよな～」
「わたしのよろいが招いたことだから」
沢田民江は、思わず今春佐代子の顔を見た。
「お店で待っています」
居酒屋の女将さんから電話があった。
「どうする？」
「酔っぱらって飛び降りないと勇気出ません」
「夜中じゃ～このビル入れないか」
「じゃ～朝にします？」
「それでも同じかも」
「じゃ～ホットウーロンハイ飲みに行きましょう」
「そうね」
今井春馬も甘根和人もいなかった。呼び出しもかからない。

●相応の責任

「こんばんわ～」
「まだこんにちわか～」
「先里さんはもうすぐいらっしゃいます」
「鳥鍋にホウレン草のおしたし食べていてください」
「ありがとうございます」
いつもの４人部屋に入ると、タブレットがテレビを写していた。
「ああ～そのテレビは先里さんから頼まれました」
「イヤホンで聞くようにとのことです」
サッカーの国際試合でもあったかどうか気になった。４月25日である。何もない。
「鳥鍋です」
「ホットウーロンハイはよろしくお願いします」
沢田民江と今春佐代子は、何もわからないまま、ホットウーロンハイをつくりはじめた。
「いらっしゃい」
19時になって先里潤がやってきた。
「お先にいただいています」
「煮詰まってるでしょ？」
「新しい鳥鍋用意しました」
「女将さんがボウルいっぱいの鳥鍋の材料を持ってきた」
「私はペコペコです」
沢田民江と今春佐代子は、先里潤をじっと見るしかない。
「イヤホンをしてください」
「グッドデザインを獲得してヒット商品になっていた新型自転車が、デザインの盗用で、グッドデザインを返上しました」
「新型自転車は回収することになりました」
ほんの１分のニュースだった。聞き逃してしまう。
沢田民江が、向井坂治のマンションから乗って帰って、向井坂治のマンションに乗って行った自転車である。
先里潤は、黙って席を立った。
「この自転車ってもしかしたら」

「向井坂治がグッドデザイン賞をもらった自転車」
「このタイミングですか？」
「日本の自転車の会社怒っただろうな～」
「多分だけど～フランスの自転車の会社っぽいですよね～パクられたの」
「先里さん～これ見せようとしたの？」
「多分」
「なんで知ってるの？」
「さあ～」
「どこ行ったの？」
「わかりません」
沢田民江と今春佐代子は、これからどうなるのか見当もつかなかった。
ホロホロ鳥の唐揚げを持って来てくれた女将さんに、沢田民江が聞いた。
「先里さんはどこかに行かれたんでしょうか」
「向こうでドイツと電話してます」
「昨日からずっとフランスとドイツと電話してます」
「何の電話ですか？」
「ドイツ語だからわかりません」
「昨日はフランス語でした」
「熱いうちに召し上がれ？」
「ありがとうございます」
先里潤はフランス語が話せるのだと思った。
「パリって何時？」
「わかりません」
「ネットで調べて」
今春佐代子は、タブレットで調べた。
「11時半です」
「お昼？」
「ええ」
それから１時間も先里潤は部屋に帰って来なかった。
「わたしたちはどうなっちゃうんですか？」
「今何時？」

「21時前です」
「不安になってきた」
「唐揚げ食べました？」
先里潤が帰ってきた。
「９時になったら池尻製菓のホームページを見てください」
今春佐代子は、池尻製菓のホームページを開いた。何も変わったことはない。まだ21時になっていない。
「自転車の会社のホームページを見て」
今春佐代子が、さっきのニュースにあった自転車の会社のホームページを開いた。
お客さんにお詫びである。
グッドデザイン賞にもお詫びである。
フランスの自転車会社にお詫びである。
「21時になったわよ？」
今春佐代子は池尻製菓のホームページを開いた。
お客さまにお詫びである。
ドイツのボンのショコラティエの会社とウイーンのショコラティエの会社にお詫びである。
そして、責任者の甘根和人が取締役を退任して工場長になった。大野欣二が取締役候補になった。
「わたしたちはどうなるんですか？」
「その前に大阪のショコラティエに電話してください」
「これで許していただけないでしょうか」
今春佐代子は、大阪のショコラティエに電話をした。
「了解だそうです」
「よかったですね」
「わたしたちはどうなるんですか？」
「私にはわからないけど覚悟した方がいいです」
「わたしたち明日の朝ビルから飛び降ります」
「余計なことです」
「どういうことですか？」

「向井坂治には、もう誰もオファーはしません」
「甘根和人は責任をとりました」
「相応です」
「相応ってなんですか？」
「あなた達が死ぬことは相応ではありません」
「せめて辞表でしょう」
「特に沢田さんは」
「今春さんはサラリーマンとしてフツウの行動でしょう」
「もし沢田さんがショコラティエになりたくなったらボンのショコラティエを紹介します」
「自分の小さなお店をやるのもワルクないと思います」
「３年くらいかかるかもしれないけど」
「お願いします」
「ホントですか？」
「明日の朝死ぬよりはいいです」
先里潤は、また席を外した。
「わたしたち死なないんですか？」
「あんた会社辞めないでもいい」
「あんたの責任は甘根和人にあるから」
「わたしは責任ある」
「マンネリになってきたからこんなことが起きたんだから」
「もし先里さんが紹介して下さるんだったらボンに行く」
「先里さんってなんなんですか？」
「わたしに新橋の博多モツ鍋のお店でホットウーロンハイを勧めたおじさんかおじいさん」
「どうしてここまでやってくれるんですか？」
「女将さんがもうすぐわかるって言ったのってこれだね」
「なんですか？」
「本の中に書いてあったけど～あなたが幸せだったら私が幸せ」
「何にも先里さんのプラスないんですけど」
先里潤が帰ってきた。

「ドイツ語で希望することを書いてメールしてくださいです」

「わたしドイツ語ダメです」

「英語でいいです」

「宛先はここです」

「ホームページですか？」

「私が保証人です」

「沢田民江と今春佐代子は先里潤の顔を見た」

「どうぞ書いてください」

「ここでですか？」

「今決めることが沢田さんの責任の取り方として相応です」

『パクリー向井坂のよろい』

２０１４年

げんじあきら

よろいについては、『よろいってなんだ』『壊れるよろい』『脱げないよろい』『ルイハシのよろい』『ちかのよろい』『心棒ー朗人のよろい』『虐待ーさじのよろい』『いじめーゆいのよろい』『無視ー太田垣のよろい』『隆家のよろい』『追従ージンのよろい』を読んでいただきたい

パクリー向井坂のよろい

著者　　　げんじあきら